

大川フォーラム

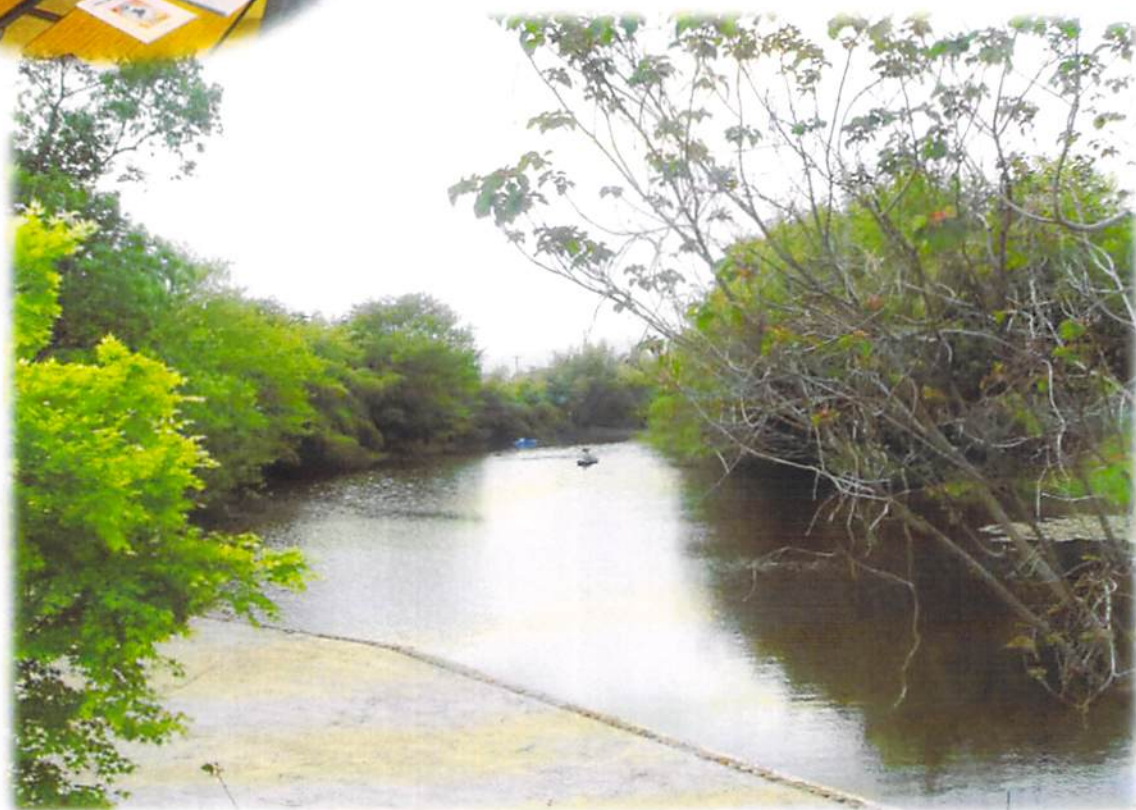
「里川・里湖(うみ)のまちづくりから ～住民・研究・行政の協働～」



美崎自治会館平成 23 年 12 月 3 日(土)

主催:大川活用プロジェクト

美崎自治 守山市、立命館守山高等学校、京都大学(生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)



大川活用プロジェクト 平成 23 年度活動報告書

美崎自治会 守山市 立命館守山高等学校

京都大学(生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)

目 次

	頁
大川フォーラム挨拶	
美崎自治会 伊藤 潔	1
第一部 基調講演	
自然とともにある暮らしと地域おこし ―アジアの農村開発からみた大川の取組―	
京都大学東南アジア研究所 安藤 和雄	3
第二部 事例報告	
1. 大川の環境改善への取り組み（平成23年4～11月期実績）	
美崎自治会 田中 滋	10
大川の環境学習会の報告 子ども会代表の発表	
美崎子ども会 岡 尚吾 片山 陽斗	11
環境学習会のまとめ	13
2. 大川の水環境と水質の改善に向けて	
立命館守山高等学校 塩崎 景子	14
3. 「世代を超えた地域づくり ～伝統や文化の保存を通して～」	
京都大学生存基盤科学研究ユニット 矢嶋 吉司	16
第三部 パネルディスカッション	
大川ではじめる里川・里湖のまちづくり	20
資料	
1. 大川フォーラム 企画書	32
2. 大川フォーラム チラシ	33
3. 平成23年度版 里川里湖のまちづくり計画書	34
4. 大川についてのアンケート 分析結果	42
5. 大川についてのアンケート用紙	50
6. 大川だより 第1号	51
大川だより 第2号	53
大川だより 第3号	55
編集後記	57

大川フォーラムがめざすもの

美崎自治会 伊藤 潔

パリとセーヌ川、京都と鴨川、ローマとトレビの泉などはあまりに有名ですが、世界の多くの魅力あるまちには必ずといっていいほど川や水辺があります。

美崎もかつてはそうでした。大川には豊かな水流と川原があり、子ども達は水遊び、大人たちは投網打ちに興じました。無論たびたび洪水に襲われましたが、それも大川との多様な関わりの一つの側面でした。

しかし、野洲川新川の通水とともに水循環は失われ、水は澱み、水草が繁茂する川となり、いつしか大川は人々と関わりのない忘れられた存在となりました。

今、大川環境改善に取り組むとき、昔の姿の再現を目標とすることは現実的とは思えません。川原はなく閉鎖的な水域となっていることや、周辺にはホテル、ショッピングセンターといった大型集客施設が立地していることなどを踏まえ、大川の持つ可能性を見出しつつ人々との新しい関わり構築や魅力づくりが目標になります。

では、それはどんな姿なのか。まだイメージも描けていませんし、モデルもありません。これから知恵を出し合い、議論をしていくなかで創り上げていくものといえます。幸い、京都大学生存基盤科学研究ユニットや立命館守山高校スーパーサイエンス・ハイスクール推進機構、守山市、そして地元美崎自治会が連携して「大川活用プロジェクト」を立ち上げることが出来ました。そのプロジェクトが協働して開催するのが今回の「大川フォーラム」です。

フォーラムでは、それぞれのこれまでの取り組みを報告するとともに、大川を中心にこの地域の将来を語り合いたいと考えています。

「大川活用プロジェクト」のこの取り組みは、住民、研究や教育、行政の関係者が連携し、ともに知恵を出し、汗を流す新しいまちづくりのモデルとなることも期待されます。皆さんのご理解をお願いします。

大川フォーラム挨拶

美崎自治会 伊藤 潔

皆さんにはお忙しいところこの「大川フォーラム」にご参加をいただきましてまずお礼を申し上げます。

恐らく美崎でフォーラムといった催しが開かれるのは初めてだろうと思います。それだけにどれだけご参加いただけるか心配でしたが、このように沢山ご参加をいただき主催者の一員として大変喜んでおります。

そこで私のご挨拶ですが、自治会ではこれまで大川への取り組みをまとめて説明する機会がなかったものですから、皆さんの中には大川をテーマにこうしたフォーラムが開催されることになった経緯や目的などに十分ご理解いただいていない向きもあろうかと思えますので、フォーラムの道案内という意味を含めましてこれまでの経緯や目的について簡単に申し上げてご挨拶に代えたいと思います。

3点申し上げます。

一点は大川についての理解・認識です。大川は申し上げるならば2つの顔を持っています。一つは生活の場に密着した里川としての顔です。もともと大川は野洲川の南流として豊かな水の流れと砂浜があり、子ども達の水遊びの場であり、おかずになる魚を取る場でした。同時に毎年のように洪水に襲われる怖い川でもありました。そういう意味では正に人々の生活と密着した川であり、フォーラムのテーマに使っております「里川」そのものでした。それが野洲川新川の通水とともに洪水の恐れはなくなりましたが、反面、水の流れはなくなり、水資源機構の水門が出口を事実上ふさいでいることもありほぼ閉鎖水域となって今日に至っております。その結果、私たちの美崎地区の真ん中に極めて悪い環境の水域が残されたことになりました。

もう一つの顔は、資源としての可能性の顔です。大川周辺は県内でも有数の景勝地であり、大型のホテルやショッピングセンターが立地しているほか、ハマヒルガオ自生地や菜の花畑といった魅力的な場所があるという一面を有している資源としての顔です。

そうしたことから、今、ようやく大川はこのままでいいのか、もっと魅力的な川にできないのかという議論が出始めてきたといえます。

次に二点目ですが、大川への取り組みの現状についてお話しします。自治会では昨年からは大川を環境を少しでも良くしようという思いから水草の除去に取り組み始めましたが、今年度からは守山市の応援も得られるようになりました。また、こうした取り組みに、アジアの生活文化や地域づくりを研究されている京都大学東南アジア研究所の皆さんに関心

を持っていただき、さらには立命館守山高校が文部科学省からスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けられ科学教育のフィールドに大川を選んでいただきましたことから、期せずして京大、立命館守山高校、守山市、そして美崎自治会が連携して大川に関わる体制ができました。これが「大川活用プロジェクト」です。プロジェクトでは、調査・研究活動や環境改善活動などを進めながら平成25年度には仮称ですが「大川整備計画」を策定することを予定しています。

3点目はこれからの取り組みの方向についてです。申し上げましたようにプロジェクトでは25年度に大川の整備計画を策定することとしておりますが、内容についてはまだまったく議論は進んでいません。まさにこれからの課題です。そして、その議論・検討の第一歩が今日のフォーラムということになります。

ということで、少し長くなりましたが、挨拶に代えてフォーラムの道案内をいたしました。

それでは、2時間お付き合いください。



写真 美崎自治会 伊藤 潔会長



写真 会場風景

第一部 基調講演

自然とともにある暮らしと地域おこし ーアジアの農村開発からみた大川の取組ー

京都大学東南アジア研究所 安藤 和雄

1. 里への注目

里という言葉が注目されています。里山という言葉にはじまり、里山、里地、里海、里川、里湖の名前が入った環境保護や保全の取組が行われるようになりました。大川での皆さんの取組もこの大きな流れの中にあります。里山以外は、近年の造語です。里山は、古く、18世紀の名古屋の徳川藩の文書にでています(養父 2009:8)。奥山との対比や、里に近い山という意味でもちいられていたようです。里山以外は、実はそれほど里との関係では、意識的に捉えられていなかったのが、地、海、川、湖だったのです。里地ということばにいたっては、私は、もともとの里にその意味が込められていたと思うのですが、恐らく里山が脚光をあびはじめて、農耕地や集落を明確化するために里地ということが使われはじめたのではないかと、と想像しています(定義などについては、注1を参照してください)。

しかし、いずれも多少気がかりなことがあります。里山、里地などと表現することで、村や人が集まって暮らす場所という本来の里の意味が薄れてしまっているのではないかと思うのです。里地、里山、里海、里川、里湖も、本来は里を構成する、暮らしの場として里の一部であったはずです。里に住む人にとっては、それは、身近な山であり、田んぼであり、海、川、湖であったのです。皆さんにとって、大川や琵琶湖をことさら里川、里湖、ましてや、自分たちの村の農耕地やたたずまいを里地などと呼ぶことがないのは当たり前なのです。ただし、外部の人にとっては、大変イメージしやすくなりました。特に、人の関与によって成立している農耕地や雑木林などの二次的自然の存在が明確となったのです。その一方で、里という言葉が、近年もてはやされるようになったのは、離村や高齢化による過疎・限界集落の問題がこの数年日本各地の農村で顕著化していることにもよるのではないかと私は思っています。そして、里とそれを構成してきた地、山、海、川、湖などの二次的自然が誰の目にも明らかになりました。大川や琵琶湖湖畔の環境保全や利用への皆さんの思いも、こうしたことに通じるのではないのでしょうか。里の人が関与することのなくなった農耕地や山の二次的自然の荒廃が近年いっきにすすんでいて、荒廃する農耕地や山は人の関与から離れた一次的自然(という言葉があるかどうかわかりませんが)に戻っています。それを私や農業関係者の多くは荒廃といえます。

生物の多様性の問題から里の二次的自然がよいと言われていますが、私は正直、地、山、海、川、湖の本当の気持ちはわかりません。しかし、伸び放題になった雑草に覆われた耕地や、林床が整理されず、間引きされていない森林などを見ると、直観的に美しくないと感じ、これでは、里の人が泣いている。だから、地、山、海、川、湖も泣いているだろう

と思うのです。感情論を乗り越え、里の人も街の人も里の荒廃の問題を共有して理解していくためには、一次的自然と二次的自然を区別し、農村部で起きている環境問題を整理することが大変有効なのです。単に自然に親しむこと、自然を守る、ということになると、どちらの自然をさしているのか、どちらがそこに暮らす人にとって重要な存在であったかが不明瞭になります。だから、里地、里山、里海、里川、里湖という区別は、農村部での自然と人の関係を整理し考える上では、便利な区別の仕方なのです。近年は、里地里山の現状について、農林水産省でも「人と自然が織りなす里地環境づくり」の冊子を発行し、こうした里の二次自然的の荒廃問題を指摘しています（注2）。

2. 里の二次的自然の荒廃—周防大島町久賀地区—

二次自然の荒廃の事例をご覧ください。写真1と写真2は、瀬戸内に浮かぶ、山口県周防大島町久賀地区の「里山」です。竹林で覆われていますが、竹林は人が関与して栽培されたものではありません。放棄された水田の跡です。



写真1 久賀地区の里山 冬の景観



写真2 久賀地区の里山 夏の景観



写真3 久賀地区の棚田の原型



写真4 久賀地区の棚田のスイトウ

昭和30年代のみかんの栽培がブームとなるまで、周防大島町久賀地区は、島の集落の里山には、石垣の見事な棚田が広がっていました（写真3）。瀬戸内の少雨の水を少しでも効率よく使うために、「スイドウ」と呼ばれる暗渠がつけられていました（写真4）。この地域の人々が瀬戸内の少雨に適応して稲をつくってきた工夫の表れです。里地里山が荒れていったのは、農業・農村の衰退と密接に関係しています。周防大島町は全国でも屈指の過疎、高齢化の地域となっています。表1には、水田の面積と収穫量、みかんの栽培面積の変化が示されています。この表から分かるように、昭和昭和40年代以降、みかん畑の栽培面積も減少しますが、水田の作付面積は急激に減少します。棚田が放棄されつづけて、現在にいたっているのです。表2には人口動態が示されていますが、生産年齢人口が久賀地区からこの時期減少していたことがわかります。表3は、農家人口の変化が示されています。久賀地区では、表2と比べることで理解されるように、数値的に若干のずれがありますが、総世帯数の減少は実は農家の減少だったのです。こうして久賀地区の農村景観は昭和30年代と現在とでは、まったく異なった景観となってしまふのです。周防大島町の事例は、もっとも現在の日本の農村の置かれている典型的な事例ですが、多かれ、少なかれ、こうした現象が農村部で起きているのです。

表1 周防大島町久賀地区の米の作付面積と収穫量
みかんの栽培面積の変化

	米		みかん
	作付面積(ha)	収穫量(t)	栽培面積(ha)
昭和35年	346	1140	409
昭和40年	189	674	420
昭和45年	78	288	407
昭和50年	44	186	365
昭和60年	31	132	284
平成2年	24	100	267
平成7年	17	81	247
平成14年	10	46	236

出所)久賀町史 現代編 265-266ページ

表3 農家人口の変化(人・戸)

年次	農家人口	総農家数	専業農家数
昭和35年	4402	999	437
昭和40年	3780	941	350
昭和45年	3323	921	256
昭和50年	2880	872	263
昭和55年	2487	806	277
昭和60年	2109	723	283
平成2年	1651	583	278
平成7年	1339	506	234
平成12年	1204	453	132

注)平成12年の専業農家数は販売農家のみ
出所)久賀町史 現代編 260ページ

表2 周防大島町久賀地区の人口動態

年度	年少人口		生産年齢人口		高齢者人口		総人口	総世帯数
	0-14歳	構成比%	15-64歳	構成比%	65歳以上	構成比%		
昭和35年	2231	26	4597	59.50	892	12.2	7720	?
昭和45年	1320	20.5	4193	65.30	911	14.2	6424	2146
昭和55年	1057	17.7	3758	63	1148	19.3	5963	2195
平成2年	674	13.1	3047	59.4	1409	27.5	5144	2164
平成12年	447	10	2393	53.4	1643	36.6	4483	2104
平成15年	?	?	?	?	?	?	4431	2086

出所)久賀町史 現代編 208-210ページ

3. アジアの隣人たちの感想と共通の離村・離農問題

周防大島町と、京都府の過疎地である南丹市美山町の視察に、バングラデシュ、ミャンマー、インド、ブータンなどのアジアからの訪問者を連れていくことにしています。そこで日本の農村の現実を見てもらっているのです。すると、皆さん、自分の国の農村を、このような過疎地とはしたくないといいます。しかし、残念なことです、日本ほどに過疎化、離農が進んでいないとしても、現在、アジアのこれらの諸国でも、若者の農業離れ、都市への集中が始まっています。

11 月の中旬に、若きブータン国王と王妃が来日され、ちょっとしたブータンブームが日本国内で起きました。私もブータンにはよくでかけています。12 月 5 日～24 日にかけても東ブータンの農村地域にフィールドワークで入ります。私が通っているのは、ブロックパとモンパと呼ばれる牧畜や農耕を主な生業とする人々です。彼らは東ブータンからインドの東部のアルナーチャルプラデシュ州のブータン国境沿いの標高 2000m～4000m にかけて集落や牧草地をつくっています。居住している人たちです。近い街から徒歩で一日、二日かけなければ入れない集落や村もあります。そんな村でも、日本と同じような問題が起きているのです。8 月に東ブータンのタシガン県の知事やブータン中央政府の保健局長らと美山町に一泊視察をしました。その時、国王もブータン政府も、今一番頭を悩ませている問題の一つが、若者の離村、離農の問題です。一刻も早く手段を講じないと、過疎化がいきに進む可能性がブータンの農村でも存在していると、ブータンからの訪問者はコメントしました。私も、このことには正直驚きました。人口 60 万人のブータンでは、現在 13 万人が首都のティンブーに住んでいるといわれています。民主化とともに近代化、市場経済化の波はいきに農村を飲み尽くそうとしているようです。先代の国王は、経済開発にかわる幸福開発 (GNH) という概念を打ち立て、それが、今世界で注目を集めているのですが、前途は多難なようです。

しかし、はっきりしていることは、日本の農村が経験したように、日本では、農村の生活環境をかぎりなく都市に近づけ、社会経済発展をすることが農村の幸福につながると信じられてきたのですが、結果的には、農村の崩壊をまねいてしまうことになったのです。明らかに、日本の農村の発展に対するボタンの掛け違いがあったと認めねばなりません。アジアの国々は、今、農村の経済発展がかならずしも農村の持続的発展を実現することにつながっていったいないことに、うすうす感じはじめています。

今年の 8 月に、ブータン、ラオス、ミャンマーからの訪問者を美山町や山口県阿武町にお連れしました。阿武町では農村開発に関する草の根の国際会議を行いました。その時に、ブータンの方から「村から若者が去っていくのは、街の模倣をしてきたからではないのか。模倣は本物にはかなわない」というコメントがありました。また、「すくなくとも中学校くらいまでは、かならず、農村で過ごして、農村の良さを教えるべきだ。日本では農村で暮らすことの良さを教えてきているのか？」と尋ねられ、答えに困ったのです。



写真5 アルナーチャルプラデシュ、バルチ村

写真5は、アルナーチャルプラデシュのモンパの村の9月の景観です。ソバの花が咲き、桃源郷のような景観です。私はこの風景に見とれてしまいました。こんな風景が今も世の中に残っているのだと、驚きをもって心底思ったのです。しかし、この村でも、確実に、日本の農村の苦しみの轍を踏みつつあります。解決の糸口が見えない問題ですが、私は、ブータンの方や、大川の皆さんの活動に、確かな糸口を感じています。

4. 世代をつなぐ里—美崎自治会・大川活用プロジェクトへの期待—

日本やアジア諸国がとってきた農村開発の問題点を一言でいえば、世代の連続性を担保していく仕掛けをもたず、とにかく、現在はだめ、過去もだめ、未来に向かって変わることばかりが外から要求されてきたのです。私の父もそうでした。私の実家は名古屋近郊の農家で、そのあたりの風習は農家の長男が実家をつぐことがよいこととなっています。しかし、父は、私が公務員か教員となり、家から通ってくれることを期待していたようです。かといって、すっぱりと農業をやめるわけでもなく、口癖としては、「農家が百姓をやめて、土地を手放したらおしまいだ」となんでも聞かされました。私は、幸か不幸か、一度実家を離れ、バングラデシュにほぼ連続して12年間住むという経験をするのができ、今もこうして、日本やアジアの国々を飛びまわっています。しかし、今の私の暮らしの中心柱の一つは、実家で81歳の母の要求で農作業をすることです。だから、農繁期には農作業の予定を最優先して、実家の農業を手伝っています。時々、田畑で母と話します。すると、「なんにもいいこたなかった。田んぼや畑仕事ばかりで、大変なおもいばっかしだった」と笑いながら愚痴話をします。私の相槌はいつもきまって「いいじゃないの、81歳になっても多少膝は痛いけど畑仕事できて、腹いっぱいご飯が食べられるんだから、そんなことを言ったら罰があたるよ」と、私も57歳になると、これくらいのことが言えるようになるのです。母の気持ちもよくわかります。年金も微々たるものですし、朝から晩まで働きづめであったのを子供であった私は一番知っています。しかし57歳くらいになると、少しは、農業や農家の良さ、里地で生きる（農のある暮らし）ことの良さが実感できるようになります。母と共通の仕事を通じて会話ができて、世代を超えて、何かが伝わってくることを実感しています。私には22歳の息子がいます。一番気がかりなのは、大正13年生まれの75歳で他界した父と私はほぼ同じような里地の景観を見て育ったのですが、今では私の実家のまわりは都市化して、すっかり里地の景観を変えてしまっていることです。息子はバ

ングラデシュや京都の街で暮らしていることもあり、里の景観を私と共有できていないのです。私は、今日の日本の農村で問題となっていることは、あまりにも急激に里の景観や環境条件を効率主義で変えていったことにあるのではないかと、思うのです。今や日本のほとんどの農村は、30～50年前の姿を残していません。ましてや、用水路や農耕地は整備され、私の年齢くらいの者が遊んだ里はどこを探してもないのです。世代を超えて共通する記憶を財産として継承させる仕掛けが本来の里にはあったはずですが、だから、「ふる里」なのではないのでしょうか。

美崎の皆さんは、大川を自分たちで取り戻そうとしておられます。是非、取り戻した大川の姿は、最低でも100年くらいは継続してほしいのです。幸い、大川のプロジェクトには、小学生や立命館守山高校の生徒など、世代を超えた取組が実現しています。こうした地域おこしの取組は、日本でもめずらしいと自治会長さんから聞きましたが、アジアの中では、まさに先進的な取組です。アジアの村々の多くは、世代を超えた連続性の中で発展してきています。基本的に日本の村々と似た特徴があります。離村・離農を食い止めることは不可能であり、それも時代であるのだからしかたがない、と思われる方も多いことでしょう。私もそういう考えは否定しません。しかし、私自身農家に生まれ、里地に育った経験から指摘できることは、里は世代を超えたつながりをつくっていく器であったことです。大川と大川が注ぐ琵琶湖畔を里川・里湖として、その景観、利用をデザインし、百年の長きにわたって美崎の里の人たちが経験をつなげる二次的自然を大川プロジェクトでつくっていきましょう。それこそが地域おこしの原点であり目的であると、私は確信しています。それが里の固有の文化をつくり、歴史を育みました。そして「私たちの里の誇り」をつくってきたのではなかったのでしょうか。大川プロジェクトが示している世代を超えたつながりをうんでいく仕掛けをさらに強化し、大川という里川・里湖を土台として、里づくりの一つの新しい農村開発のモデルが発展していくことを願っています。また、それが実現すると確信しています。ご静聴ありがとうございました。

注1) 特に、環境省は2004年頃までは里地、里山を区別して定義していたようですが(養父 同上)、インターネットの環境省自然環境局の「里地里山の保全・活用」の手引きでは、里地と里山を区別せずに、「奥山と都市の中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原等で構成される地域概念」と定義しています(注3)。また、養父さんは、著書のなかで、「水と空気、土、カヤ場や雑木林から屋敷、納屋、牛馬小屋、畑、果樹園、竹林、植林、ため池、小川、水田、土手、畦など、一連の環境要素が一つにつながった暮らしの場」とし、海岸部や湖沼の近くでは、その一部に里海や里湖が加わると、再定義しています(養父 2009:9)。養父さんの定義が環境省の定義と異なっているのは、個々の環境要素が連続してつながって暮らしの場をつくっていると明確化したことです。環境省の定義には、各環境要素の組み合わせや、その組み合わせを行ってきた住民の主体的関与の姿が明確ではありません。さて、里海につ

いては、発案者が分かっています。1990年代後半に、柳井哲雄さんが提唱されました。インターネットの図書販売であるアマゾンで柳井さんの「里海論」恒星社厚生閣(2006)の本の内容の紹介欄には、柳井さんが「里山を参考にして里海を提唱する」と書かれています。里川という言葉が世に広まった契機となったのは、恐らく、里川が本の題名に最初に使われたと思われる井出彰 著「里川を歩く」風濤社(1998)が出版されたことが大きいのではないかと思います。その本の帯の言葉に、著者の井出さんは「里山、里道という言葉は辞書にはない。が、すぐにイメージが湧くいい言葉だ。だったら里川という言葉があってもいい」と記しています。ただし里山という語彙は「広辞苑第五版」に掲載されました(井出 2001:251)。里湖については、やはり2000年前後から、平塚純一さんや、佐野静代さんらによって造語として使われはじめたようです(佐野2008)。佐野さんは、論文の中で、里湖は、雑木林と同じように、人間が利用することで成立してきた水辺の二次的自然であり、人間活動の関与の観点から里海と大きくことなっていることを指摘しています。

注2) 農林水産省のホームページ

<http://www.maff.go.jp/j/nousin/sigen/satochi/index.html>を参照。また、ホームページには、以下のように述べられています。

「里地里山の現状は、都市活動に伴う環境負荷の増大と高齢化・過疎化に伴う農村維持の限界などの問題があります。一方、国土の保全、水源涵養、自然環境保全、良好な景観の形成、文化の伝承、情操教育等の多面的機能や、ふるさとの原風景、心のよりどころとしての価値が見直されています。」

注3) 環境省自然環境局は「里地里山保全再生計画作成の手引き」を作成し、以下のホームページで公開しています。

<http://www.env.go.jp/nature/satoyama/tebiki.html>

引用文献

井出彰 2001 『休日、里川歩きのすすめ』 平凡社。

佐野静代 2008 「「里湖」研究意義—水辺の「二次的自然」をめぐる—」滋賀大学環境総合研究センター研究年報 Vol.5 No.1 : 31-37.

養父志乃夫 2009 『里地里山文化論 上』 農山漁村文化協会。

第二部 事例報告 1

大川の環境改善への取り組み
(平成23年4～11月期実績)

美崎自治会 田中 滋

○平成23年度の取り組み目標

- ①自治会員参加のもとに繁茂する水草の除去活動等の実施
- ②子ども達が参加する環境学習会の開催
- ③大川の未来を議論するための基礎的な意向調査の実施
- ④京大ユニット・立命館守山高校・守山市との連携・協働

○取り組み実績

実施月日	活動内容	参加者数	備考
4月17日	水草の除去活動 (中流部)	23人	
6月26日	水草の除去活動 (上流部)	36人	
7月3日	水草の除去活動 (中流部)	52人	
7月23日	大川自然観察会 (河畔や川の中の植生観察)	約45人	野洲川でんくうの会との共催
7月24日	大川法面の除草活動 (美崎グラウンド横の法面)	27人	
9-10月	大川アンケートの実施 (現状認識や取組への意向把握)	回答数 95人	アンケート結果 (巻末資料参照)
10月23日	水草の除去活動 (全域)	40人	
10月30日	環境学習会の開催 (水質や魚類調査等)	約70人	「学習会のまとめ」 参照

大川の環境学習会の報告 子ども会代表の発表

美崎子ども会 岡 尚吾
片山 陽斗

- ぼくたち美崎の子ども会は、10月30日に開催された大川の環境学習会に参加しました。その時の内容を発表します。

- 大川は美崎のまちの真ん中にありますが、水はいつも黄色くにごり、夏には水草が水面をおおっています。だからぼくたちは、大川で水遊びをしたり、魚つかみをしたいとは思いません。
その大川をきれいにしようという取り組みの一つとして、大川の環境学習会を企画していただきました。
環境学習会では、水質の調査、川の底にすむ生き物調査、そして魚の調査を行いました。

- 水質の調査は、自治会館横の大川の水、美崎グラウンドの少し上流の大川の水、そしてびわ湖の水について、透視度（とうしど）や化学的酸素要求量（かがくてきさんそようきゅうりょう）と呼ばれる項目（こうもく）などについて調べました。
調査は、野村先生や立命館守山高校の生物班のお兄さん、お姉さんに教えてもらいながら、自分たちで薬品を使いながら行いました。
その結果は表のとおりでした。
表にあります化学的酸素要求量、これは水の汚れをあらわす基準の一つですが、ここにあります大川の8という数字は、日本で一番汚れている霞ヶ浦（かすみがうら）の平均数値の9.8に近い数値です。
はじめて水質調査をしたぼくたちが調べた数値からみますと、大川の水は大変汚れていることがわかりました。

- 次に、川の底の生き物調査を行いました。
川の中にはたくさんの生き物がすんでいます。その種類は水のなかにとけている酸素（さんそ）の量と深い関係があります。たとえば、酸素の量が少なくなるときれいな水にすむ生き物がすめなくなります。このことから川の生き物を調べることで水質などの川の環境の状態（じょうたい）がわかります。
そこで、自治会館横の大川、美崎グラウンドの上流、そして野洲川のそれぞれの川の底に土のなかですむ生き物を調べることにしました。
しかし、残念ながら今回の調査では、さむい時期になっていたせいか比較できるだけの十分な生き物がみつかりませんでした。

来年はぜひきちんと調査ができればいいと思います。

- 3番目の大川の魚の調査は、前の夜にしかけてもらっていた網にかかった魚を調べるとい調査でした。網には、フナ1ひき、ブルーギル2ひき、カムルチー、これはどじょうのような姿をした大きな魚で、「たいわんどじょう」とも呼ばれているさかなですが、これが1ひき、そしてミドリガメ2ひきがかかっていました。
このうちもともとに日本にいたのはフナだけで、あとは外来生物（がいらいせいぶつ）と呼ばれるよその国からきた生き物です。このことから、大川には外来生物がたくさんいることがわかりました。
- 今年のぼくたちの調査は一回だけの簡単なものでしたが、こうした環境学習をつづけていけば、大川が環境がだんだんはっきりするばかりでなく、こどもたちの環境への理解や自分たちのまちへの関心も高まると思います。
- ぜひ来年も環境学習会をひらいてください。

以上でぼくたちの発表を終わります。



写真 子ども会の報告



写真 自治会の報告

環境学習会のまとめ

- ◇学習の日 平成23年10月30日
- ◇学習の場所 美崎自治会館ひろば
- ◇教えていただいた方 野村潔さん、立命館守山高校生物班の皆さん

◇水質調査

○調査の目的

大川と琵琶湖の水質を調査することで、汚れの程度を調べる。

○調査の結果

調査した水の 採取場所	大川の上流 (グラウンド横)	大 川 (自治会館の横)	琵琶湖 (大川の沖)
透 視 度	10cm	12cm	100cm以上
PH	6.5	6.3	6.3
水素イオン濃度			
COD	8mg/L	8mg/L以上	1mg/L
化学的酸素要求量			
NO ₂ -N	0.7mg/L	0.5mg/L	0.3mg/L
亜硝酸態窒素			
PO ₄ -P	0.02mg/L	0.05mg/L	0.1mg/L
りん酸態窒素			

◇生き物調査

○調査の目的

大川と野洲川の泥の中にすむ生き物の違いを調べて、環境の違いを確認する。

○調査の結果

生き物の数が少なく、十分な調査ができなかった。

◇魚の調査

○調査の目的

大川にすむ魚をあらかじめ仕掛けておいた網でつかまえて調べる。

○調査の結果

ギンブナ1匹、ブルーギル2匹、カムルチー（雷魚）1匹、カメ2匹

大川の水環境と水質の改善に向けて

立命館守山高等学校 塩崎 景子

大川の水環境と水質の改善に向けて

立命館守山高等学校
Sci-Tech部 生物班

3年 塩崎景子

立命館守山高等学校 Sci-Tech部 生物班

2006年4月 立命館守山高等学校 開校
SSH(スーパーサイエンスハイスクール)の指定を受ける

2007年4月 立命館守山中学校 開校
Sci-Tech部 創部
生物班のこれまでの研究テーマ
 * 琵琶湖南湖におけるブルーギルの食性
 * 学内ほたるビオトープの研究

2010年2月 第1回 高校生国際みずフォーラム(IWF) (本校主催)
8か国20校の参加 3つの分科会とポスターセッション
ブルーギルの食性の研究発表 「共同宣言」の発表

2011年3月 第1回大川の水質調査(ほぼ毎月1回)
8月 第2回IWF(静岡北高校主催)で取り組みの発表

大川と地域住民

昔は大川で釣った魚を食べ、子供は大川で遊び、近隣の人は大川とともに生きてきました。

地域住民の意見

「昔は、大川に魚が釣れたら、みんな大喜びで食べたよ。今の環境からすると、大川の魚は、もう釣れないよ。そのために、大川の水質を良くしたい！」

「『今後の大川をどうするのか』という議論の判断材料としていただけるよう現在の大川の水質データの提供と独自の水質改善の研究」

地域の方々、特に子どもたちに私たちの研究を知ってもらい、大川に関心を持って欲しい

10月30日 子どもによる水環境調査にて

水質調査-1

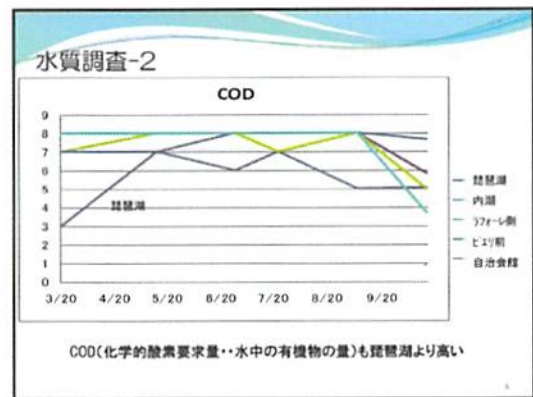
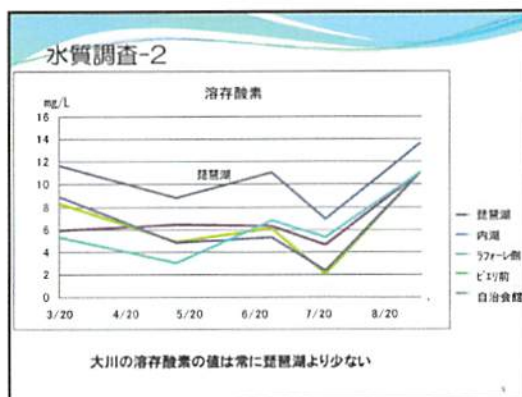
A 琵琶湖
これを基準値として

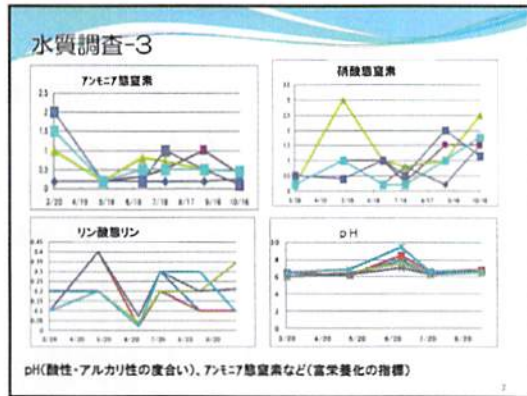
B 内湖

C ラフォーレ側

D ピエリ前

E 美崎自治会館





底質調査

大川の底質を明らかにするため、C地点での特徴的な4地点での底泥採取を行った。

	C1	C2	C3	C4
場所	大川の川幅の中間地点	大川の中のヨシ群落	水門付近ホテイアオイの群落	川岸付近コンクリート護岸オオアサギの群落
底質特徴	有機物を多く含む泥(多量)	砂と有機物を含む泥(少量)	有機物を多く含む泥(多量)	砂と有機物を含む泥(少量)
考察	C1,C3地点に多量の有機物を多く含む泥が溜まっている理由 C1:上流から運ばれてくる様々な物質がここで滞留し沈殿 C3:ホテイアオイなどの水草が枯死し川底に沈殿し腐敗			

今後の活動

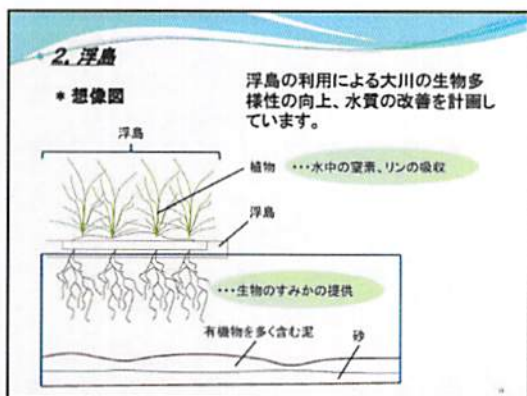
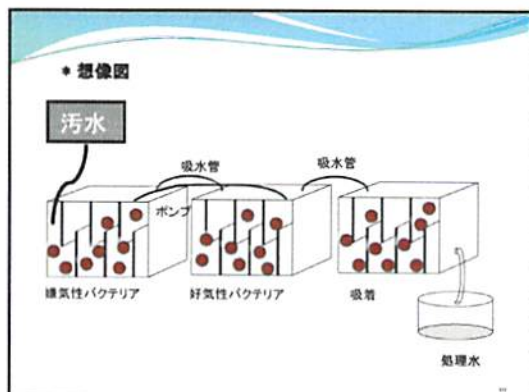
1. 水質浄化装置

私たちは水質改善に役立つ装置の基礎実験を行っています

1. 泥を直径約2センチメートルのボール状にして乾燥させ、電気炉で焼き固める

2. 焼き固めたボールをCODの高い水の中に入れて、CODの時間変化を測定。焼き固める温度や時間を変えて効果的な水質浄化ボールを研究中。

多孔質のボールの中に各種細菌が多数生息できる場を提供



• ご清聴ありがとうございました

事例報告 3

「世代を超えた地域づくり ～伝統や文化の保存を通して～」

京大大学生存基盤科学研究ユニット 矢嶋 吉司

1. はじめに

京大大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所は2008年10月から「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究（京滋フィールドステーション（FS）事業）」を実施している。プロジェクトの活動は、守山、朽木、亀岡に設けた3つのフィールドステーション(FS)を拠点とし、研究者、地域住民、住民自治組織、地方自治体、地元NPOなど、立場の異なる人々が協働しながら、実践型地域研究により日本の農山村、都市近郊の望ましい将来像、特に、京滋地区での生存基盤のモデル確立を目指してきた。

まちやむら、そこに住む人びと(ざいち)の知恵や生き方(ち=知)から学びながら、これまで、近江の伝統的食文化、在来魚と外来魚の食利用の考察、FSを拠点とする地域連携の推進(守山FS)、火入れによる林野利用の復元、伝統的生業と現代技術の組合せによる新たな生活基盤の模索(朽木FS)、保津川の筏流し復活を通して、人・山・川・町の繋がり再構築(亀岡FS)などの活動を行い成果が上がっている。



図1. フィールドステーションの位置

2. 日本の事例紹介

亀岡FS関係者(京都学園大学の教員、保津川下りの船頭さんなど)が協働している保津町自治会、亀岡市文化資料館の活動を以下に紹介する。

保津町自治会

保津川の筏流し、船運などの長い歴史がある旧村(学区)保津町は、保津川が流れる亀岡盆地の下流域に位置し、水害が常襲し、長い間、田畑や家屋が被害を受けていた。平成10年上流に日吉ダムが完成したことによってようやく洪水から解放されることになり、農地再編整備事業(平成12年)など町内のインフラ整備とともに、住民自らが地域の課題を解決できる地域づくりが始まった。



図2. 保津町鳥瞰 (保津町自治会)

平成 13 年若い世代による町内横断的組織「まちづくりビジョン推進会議」結成、全世帯へのアンケート調査(平成 15 年度)をもとにした 50 年・100 年先を見通した未来のまちづくり計画が作成された。平成 17 年集団的な営農を行う「農事組合法人ほづ」を結成し、農業後継者問題や農地の維持管理などに取り組んでいる。「保津町自治会」は計画の実施・行政機関との調整・保津町の総括、「保津町まちづくりビジョン推進会議」は自治会の諮問機関・計画の策定見直し・町内関係団体の連絡調整・村づくりの推進、「農事組合法人ほづ」は農業振興・安全安心な農産物生産・保津ブランド農産物・農地・水・環境保全向上対策、と、保津町のまちづくりのそれぞれの役割を果たしている。

以下に保津町で実施されている主なプログラムを紹介する。

① かわまちづくり 「いきもの共生」保津川すいたん農園プラン

保津町の 3 つの資源、自然(豊かな水と生物多様性)、歴史(大都市近郊の地産地消の地、京都の名称地)、ひと(保津町のひとのつながりと地元大学の存在)を活用。「水に親しむ、川辺の自然に親しむ親水公園」、「地産地消・体験型の農業公園で都市と農村との交流」、「いきもの共生を特色とした新しいふるさとと製品の育成」などをめざす。



図 3. 保津町の 3 つの資源(保津町自治会)

② 町民参加の産品づくり - 地域に伝わる食文化をたずねて -

地元産品・資源の活用、国産・旬の原料・無添加で新鮮で美味、地元であることの親しみ・安心感、を組み入れた商品開発。マーマレード、ジャム、クッキー等を商品化。京都府立桂高校との提携(田植え機によるねぎの作付け研究、地元特産作物の開発など)。地域の食文化(食事や暮らし)を商品開発の参考にするとともに、次世代に伝える取組み(聞き取り調査)。



図 4. ふるさと産品のコンセプト(保津町自治会)

③ 保津町めぐりエコツアーの取組 (保津百景道しるべの発行)、

歴史的背景を活かした保津町丸ごとミュージアム。「保津百景道しるべ」出版とエコツアー「山里集落、てくてく探検」の実施。

「保津百景道しるべ」の 160 本の看板(子供たちの「お父さんあれ何?」これをきっかけに家族間の絆が深まってほしいという思い)。



図 5. 保津百景道しるべ

亀岡市文化資料館

保津町の活動をはじめとする保津川をめぐる環境保全、歴史や文化の保存を通じたまちづくりでは、亀岡市文化資料館が大きな役割を果たしている。

- ・京筏組による平成の筏復活事業：保津峡開削 400 年周年記念事業。保津川の筏流しの歴史、途絶えていた技術(筏の組み方、留め金の鍛冶屋など)の発掘。市民の筏体験、保津峡の筏流しなどのイベント開催。
- ・亀岡 人と自然のネットワーク「アユモドキ見守り隊」：親子を対象とした体験学習会を通じた絶滅危惧種天然記念物アユモドキの保護活動。
- ・NPO プロジェクト保津川 保津峡の漂着ごみ清掃と「オンラインごみマップ」：保津川下りの船頭さんたちをはじめとする市民による保津峡の清掃活動。ごみの原因が多岐にわたり清掃だけでは解決しない。インターネットを利用して川のごみの量や場所の情報を収集と共有 <http://gomi-map.org/hozugawa/>。
リアルタイム環境マップ(川のごみの指標化、ごみ分布の分析など)。ごみは拾うだけでなく「調べる」ことで、市民参加型ツールとして里川復活などの効果を期待。

3. 海外(ラオス)の事例紹介

ラオスなどアジアの途上国では、経済的発展と近代化を重視する開発政策が急激に展開されている。農村では、コミュニティに蓄積されてきた伝統的な文化、知識・経験が遅れたものとして軽視されている。その結果、人々の「村に暮らす誇りや生きがい」やコミュニティの「精神的結束」を弱め、人口の都市への移動の加速とコミュニティの機能低下などが進み、持続可能な発展が阻害されている。日本の中山間農漁村が経験した困難な問題や状況をまさに追いかけている。

タチャンパ村民俗文化資料館の建設

ラオス国立大学農学部との協働により、集落民俗文化資料館を設置した。活動開始に先立ち、農学部の教員を日本に招き、京都府南丹市美山町、山口県周防大島町などで、中山間農村の現状と民俗資料館による地域おこしなど日本の現状を視察してもらった。

文化資料館が設置されたタチャンパ村は、ラオスの内戦を逃れた人びとが、1988年に定住した新しい村であった。村の選定には郡役所の助言があった。農学部の先生たちは、村の世帯調査を進める一方、村人たちに資料館建設を提案した。工事費用として6,000米ドルが提供されたが、不足分は村が負担した。村が責任を持って実施した工事は、2009年11月に始まり2010年3月に完了した。



図 6. タチャンパ村民俗文化資料館

その後、建物の活用法や維持管理のための住民集会がたびたび開催された。その過程で村人が示した資料館に対する思いをまとめると、期待される「利用目的」として、文化の

保存、道具・資料の収集展示、小学校の授業に活用、村の事務所や集会場として利用、ツーリズム促進などである。さらに、少数ではあったが、民族や村のために文化資料館は必要だとの意見もあった。文化資料館の設置は村人が自文化を見直す機会となったようである。なお、現在では建物内外の清掃を小学校の子供たちや町内会が定期的に行なっている。

私たちは、タチャンパ村の民俗文化資料館が、コミュニティの絆を新しく生み出し、村づくりの中心的な役割を担うことを期待している。多民族が混住する村で、資料館を通してそれぞれの民族の暮らしや文化をオープンに話し合う機会が提供された。互いの違いを知り、自文化を改めて意識する絶好の機会である。自文化への誇りが必ず生まれ、子供や孫に自分たちの文化やくらしの知恵を伝えようとする思いも生れるに違いない。

かいま見えた村人の思い：「歌や踊りなど伝統が途絶えても、若い世代には自分たちの民族のころ（精霊信仰や鎮守の森など）はぜひ伝えたい。」

4. まとめ

歴史や文化、生態など暮らしをとりまく環境は、それぞれの場所で異なっており、具体的なプログラムや活動は必ずしも同じではない。しかし、「ちいきづくり」に取り組むための共通の糸口が見えてくる。取り組むべき課題とその解決のための機会（プロジェクト）があり、それらの課題を解決したいという「思い」で行動する人が存在する。それとともに、暮らしの内外にあるリソース(伝統、文化、知恵、技術、人材、自然、環境)やその地域のよいところを「発見」することを手助けする地域の内外(住民、NPO、研究教育、行政など)がつながるネットワークの存在である。そして、子供や孫など次世代に伝統や文化、歴史など暮らしについて地道に伝える取組みも重要となっている。

参考資料

1. 「市民参加とまちづくりフォーラム 資料集」、守山市、平成 23 年 10 月 29 日。
2. 「かわまちづくり 保津川すいたん農園 保津町のまちづくりと産品づくり」、保津町自治会・保津町まちづくりビジョン推進会議、平成 23 年 3 月 31 日。
3. 「保津百景道しるべ」、保津自治会、平成 22 年 12 月 25 日。
4. 「文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根農村開発に関する国際会議 資料集」保津町自治会他、平成 23 年 2 月 26 日～23 日。
5. 実践型地域研究ニューズレター 「ざいちのち」、京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所、2008 年 11 月 - 2011 年 11 月。

第三部 パネルディスカッション

大川ではじめる里川・里湖のまちづくり

- パネラー 安藤和雄（京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所 准教授）
八木良明（立命館守山中学校・高等学校 SSH 推進機構長）
伊藤潔（美崎自治会長）
宮本和宏（守山市長）
（各発言 敬称略）



写真 パネルディスカッション

（宮本）

まずは、このような素晴らしい「大川フォーラム」を地域で開催頂いたこと、また、100名を超える方に参加頂けたこと、更には大川に関心を持って頂いていることに心からお礼申し上げます。本当に素晴らしいことだと思います。

「大川活用プロジェクト」は、美崎自治会の呼びかけに応じた、京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所、立命館守山中学校・高等学校の生徒の皆さん、そして市行政が共同で課題解決に向け取組を進めておられる。その中心にはいつも自治会長さん、自治会の皆さんがおられる。本当に全国に誇れる取組であり、市としても是非この取組を成功させたい。美崎のあらゆる世代の方、守山市民の皆さんが、ここ大川を「ふるさと」と思って頂ける里川づくりに取り組んでいきたい。

むかし、野洲川南流にはきれいな水が流れていたけれども、一方で水害の被害もあったと聞いています。それを何とか解消しようと野洲川の新放水路が作られた訳です。そのころは、水害がなくなり安全になるならそれが一番だったのでしょう。

しかし、実はこの改修によって失われたもの、たとえば、非常に恵まれた水環境や自然

環境など、そのことが地域の皆さん、市民の皆さんの実感としてあるのだと、とりわけ、中洲や速野、美崎の皆さんからお聞きするわけです。

今、生活の物理的な側面はかなり充足しています。これから重要なことは、市民の皆さん1人ひとりに心豊かに暮らしてもらえる環境づくりだと思います。そういう環境づくりのためにも、大川の水質改善を進める、皆さんが親しめる水辺環境を作っていく、そのことで皆さんが日常的に心の豊かさを感じて頂ける「しくみ」ができるものと思います。野洲川新放水路によって安全性は確保されました。今度は失われた水環境などをもう一度皆さんとともに取り戻していきたい、そのことを何とかやり遂げたいと思います。

今、地球市民の森の整備が県によって進みつつあります。今日、この会場に来るときにも、木々が紅葉していてきれいな景色でした。もっと地球市民の森が地域の皆さんにとって身近な場所になることを期待しています。そのために一番最後の「故郷の森ゾーン」をどのように計画にしていくか、滋賀県が地域の皆さんの意見を聞きながらまとめていくこととなります。県には皆さんの意見をしっかりと反映してもらい、思いを取り込んだ公園として整備をしてほしいと思っています。

この地球市民の森からは大川へと繋がっていくわけですから、野洲川旧南流が一つにつながったまちづくりの展開も行政としてやっていきたいと思っています。そういう意味で、市政もしっかりと皆様をお支えしながら、今後取り組んでいきたいと考えています。

(八木)

今回、立命館としてこの大川フォーラムに参加させて頂き、感謝申し上げます。本校、立命館守山は守山市立女子高校が立命館に移管してできた学校ということで、地域の皆さんに支持される学校でありたいと願っております。

そのようなことから、地域との連携を大切にした取組を推進しておりまして、文部科学省のスーパー・サイエンス・ハイスクール (SSH) に指定されたこともあり、また、琵琶湖のある滋賀県ということで、地域で取り組んでおられる様々な水環境問題との連携を大切にしております。

学内に「ほたるビオトープ」を作ったり、また、びわこ豊穡の郷の皆さんと連携しながら取組を進めたりしておりまして、そういったことの一つのまとめとして平成22年に守山市を会場に行われた「高校生国際みずフォーラム」では、本校の取組を発表しました。

それをさらに飛躍していきたいということで、今回、大川の水環境改善の取組に関わらせて頂き、地域と共に、どのように大川の水環境問題を解決していくのか、また、そのためにどのような取組を進めれば良いのか、単純に研究をするだけでなく地域の皆さんの思いを考えながら取組を進めていくことを大事にしていきたいと考えています。

この取組に本校の生徒達が関わらせてもらっていることは大変ありがたいことです。これまでも、こういった発表する機会を頂くことで、生徒も大変自信を付けて発表できるようになっています。いろんな方からの評価を受け、自信を持って次につながっていくとい

うこともできています。そして、水環境の改善に関わる研究は世界中さまざまな学校で行われています。そういった学校と高校生国際みずフォーラムなどで交流する中、自分たちの研究を発表したり、他校の取組を聞いたりすることで、お互いが相手の良いところを今後の研究に取り入れ、ステップアップにつながっています。

先日は美崎自治会の子ども達を対象とした大川に関する環境学習会にも参加させていただきました。生徒たちにとっても子ども達に教える、指導するという経験は普段できないことなのですが、子ども達と和気あいあいと楽しくやってくれた。生徒達にとっても自信になったし、子ども達にとっても大いにプラスになったと思います。

先ほど子ども達が「今後もやってほしいと」言ってくれまして、本当に大変ありがたいことですし、私どもも継続してやっていきたいと思っています。

大川の水質については、先ほどの本校生徒の発表のとおり、確かに溶存酸素量 (DO) や化学的酸素要求量 (COD) の項目ではあまり良い状況ではありませんし、リンや窒素もやや多いかなという気はしますが、そこは専門家の判断が必要でしようが、富栄養化が進み大変な状況にあるということではないように思います。

先ほどアンケート結果をお聞きしますと、地域の皆さんも前向きに様々なことに取り組みたいと考えておられるようですので、私どもも元気をもらえたと感じています。今後も地域の皆さんと良い関係の中、様々な連携による取組を進めていきたいと思っています。

(伊藤)

この安藤さんたちの発表、市長や八木さんの話を聞く中、いくつか思った点、これからの取組に非常に良い示唆を頂いたなと感じた点から話しをさせていただきます。

一つめは安藤さんのやや極端に言う「『東南アジアの川』という視点で大川を見ると、まだ良い河川環境なのではないか」という発言。これは「どういう自然観を持つか」ということだと思います。おそらく、美崎住民の中でも昔の大川をご存じの方と今の大川しかご覧になっていない方では、大川に対する感覚がまったく違うと思いますし、そういう中でこれからの大川にどのような姿を求めていくのか、まさにその点が大事でしょというご指摘を頂いた気がしました。

第二に矢嶋さんからは、このような我々がやっていこうとする取組では、良いものを発見すること、且つそれをなんらかの見える形で皆が共有を図りながら議論を深めていく、そういうことが大事だという提言を頂いた。今後、美崎自治会がこの課題にどう取り組むかということでは、非常に良い知恵をもらったなと思っています。

次に市長の話の中で、「心豊かな環境をつくる」とか、「親しめる水環境をつくる」とか、そういう発言がありました。私も同じようなことを発言しようと思っておりまして、このフォーラムのテーマでもあり大川は里川ですから、山奥の清流でもなければ大河でもない、生活の傍にある河川です。この里川である大川に我々が求める「すがた」は、抽象的に言うと「どう水に近づけるか」、「どう親しめるか」ということであり、そういうこ

とでは、これからの方向について議論するテーマみたいなのをもらったなと思って聞いておりました。

そして、このことも今後のテーマになると思うのですが、八木さんが言われたとおり、私たちの地域には目の前に豊かな自然がある。かつ、そこには沢山の子ども達がいる。市内には立命館もある。更にはこの地域の環境には今後大きな舞台になれる可能性がある。これを活かさない手はない。

そういうことでは、大変な時間がかかるでしょうか、取組を進めていくことに大きな期待を持っています。

(安藤)

これまでのフォーラムでの発表や発言から、いくつかのポイントが明確になってきました。

私と矢嶋は東南アジア研究所で、これまでから東南アジア、南アジア中心の農村開発をやってきました。しかしながら、ここで行われているような子どもをまき込んだ形で取組を進めている事例、とりわけ未来を背負っている子ども達自身の手によって、環境評価を実施しているような事例は知りません。そのことに大きな意味があり、かつ素晴らしいものだと思います。

経済的に豊かになることはとても大切だと思います。幸い守山には働く所も近くにあるし、いろんなことで、私が発表した周防大島のような状態にはなっていません。しかし、よく考えないといけないことは、周防大島も写真の中では見えなかったのですが、外国の方を連れていくと「ここは道路も全部整備され、整っているじゃないか。なぜここが過疎になっているのか分からない」といわれます。

周防大島でも車で1時間も行けば働く場所があります。ではなぜ過疎化したのか。みなさん真剣に考えて行ってもらいたいですが、ひとえに農村開発や村の地域振興の思想の中にそこに住む人々が積み重ねる文化や原風景、つまり世代を過去から未来へどういうふうにつなげるかという視点が全く欠けていた、世代の連続性というか世代にわたる「地の記憶」を破壊してしまったことが大きな要因であると思います。

私はここに来て驚き、そして自治会の皆さんの試みに大きな関心をもっていることは、子ども達を主役にし、彼ら自身が評価した中から地域おこしを進めておられるところです。これは皆さん、ぜひ世界に向けて発信してもらいたい。こういうことをやっているところは世界中見渡しても無いですよ。日本でもないと思います。どこの地域でもほとんど専門家だけで評価し、決定して実施しています。

今日のフォーラムでも地域の小学生、高校生の活動成果を彼ら自身が発表しました。小学生自身がこういう地域に関心を向けた取組を続け、発言していくとどうなるか。彼ら自身がどんどん自分達の地域のことに関心を持っていくようになります。今日は驚きました。これからもどんどんやってもらいたい。おそらく子ども達は将来、きっと心の中で大川というものを感じながら生きていくじゃないかなと、私自身強く感じました。

是非皆さんに誇って頂きたいのは、ここで美崎自治会がやっていることは、世界でもここだけだということ。それほど先進的なことであると、私ははっきりと言えます

学者や専門家が考えてやることよりも、皆さんの中で議論して、皆さんがやろうとしていることをやっていくほうが、蓋を開けてみるとずっとずっと先進的であるということをお私からのコメントとして、是非お伝えしたいと思います。

一方で様々な問題もあると思います。例えば子どもと地域の関わり方にしても高齢の方は実体験として良くご存知でしょうか、私も父親から良く聞いていたのですが、地域に青年団という組織があって、その下の年齢の集まりもあった。また、お祭りや行事という社会装置もあった。つまり自然と地域に関わりあえる仕掛けがあったわけです。しかし、現在、私たちは意識的に子ども達が地域に関わせるために色々な仕掛けをして行けなければならない。昔は COD とかそういうことは測りませんが、田んぼで遊んだり、小川で遊んだりすることで、水の濁りや生物の状況から地域の環境評価をやっていた訳ですね。だからこそ、我々は今でも「大川とは何だ。これからの大川をどうするんだ」とか、そういう話ができるわけです。

ですから、このような新しい形での子ども達と地域とをつなぐ取り組み方のあり方を、どのようにある種の行事として社会装置かしていくかが非常に大きな課題です。大川の取組ですと、今は昨年からはじめて2年目で、今後大川の将来像を絵にしていくわけですが、この大川の未来予想図を描くにあたって地域はどのように関わっていくのか。また、先ほどの市長の発言では、「どういう評価をされるのですか、地元のみなさん」という投げかけがありました。

最初にこのプロジェクト「大川活用プロジェクト」は今後も地域が行政や学校と一緒に進めていくわけですが、今度どうかたちで地域を巻き込んでいくのか。たとえば未来予想図を描いていくのにその作業を引っ張っていけるような組織的なアイデアはありますか。

次に、この地域のように転入者が多い地域では、一般的にはもうひとつ大きな課題があります。この自治会では上手くいっているようにも思うのですが、旧来からの住民の方と最近他所からこられた方、いわゆる旧住民と新住民との融和という課題です。7月24日に自治会が「野洲川でんくうの会」会長 中村さんの協力のもと実施された「大川自然観察会」には自治会加入しておられない地域のマンションにお住まいの子どもと保護者の方々が数多く参加されていました。子ども達がこのプロジェクトに参加することは、保護者も含めて両者の融合が進む仕掛けとしても機能しておりこのことも非常に進歩的な取組だと思うのですが、このようなことも自治会として意図的に行っておられるのですか。

(伊藤)

この活動は昨年平成22年から徐々に活動を始めて今年本格的にやり始めたのですが、今のところは自治会役員が中心になって、地域の団体に呼びかけて協力を得ながら、取組を

進めています。来年度は是非、自治会総会で同意を得て「大川環境委員会、大川委員会」のような組織を立ちあげ、そこに様々な方に参加頂き、この組織が主体的に全体をリードしていくというしくみを作りたいと考えています。

私はこの取組には4つの大きな意義があるのかなと考えておりまして、ひとつは大川そのものの環境改善。二点目は具体的取組としても大川の水草除去。これまで4回実施しまして150名ほどの皆さんが参加されました。旧住民、新住民そんなことには問わずにいろんな方に参加頂きました。結果として地域の纏まりや一体感、地域の連帯感の醸成という成果につながって非常に意義がありました。三点目は大川をテーマにして「これからの美崎のまちづくりをどうしていくのか」、「美崎は今のような集落のままでいいのか」ということを地域の中で少し議論することができたことこれが非常に嬉しい。「将来の美崎をどうするか」という視点につながったことが非常にありがたいことでした。

それからもう一つは、子ども達に参加してもらえたことです。先ほどの安藤さんの発言にあった世代をつなぐような、そういうひとつの流れのきっかけみたいなものができたことです。

(宮本)

自治会長がおっしゃる「4つの意義」は本当に素晴らしいと思います。とりわけ、コミュニティの連帯、また子どもをまき込む取組、これが本当に素晴らしいものだと思っております。

私としましても、大川を市の課題として捉え、綺麗な環境に変えて行きたいと思っておりますし、あと、今回のアンケート、本当に素晴らしいアンケートだと思うのですが、ホテルを飛ばしたいとかそんな意見も出ていますので、ぜひ、皆さんと力を合わせて、ホテルが舞う、また、皆さんが水に親しめる、そんな大川に変えて行ける取組を皆さんとともに進めて行ければと改めて感じたところです。

現在の大川はほぼ閉鎖水域になっています。やはり水質改善に取り組もうとすると、水が流れ込まないと水が綺麗にならないという根本的な問題もあります。ここについては、職員がいろいろなアイデアを出して考えています。「農業用水を農閑期に持ってこられないか」とか、少し離れていますが、法竜川は大雨が降ると溢れるのですが、「溢れそうになった水を地球市民の森から大川に流せないか」とか、市の職員も頑張って地域の皆さんのために貢献できたらという思いで取り組ませて頂いております。

(八木)

先ほど自治会長さんから、大川を環境学習の場として活用するというお話がありました。また、安藤さんからも「世代をつなぐ」というキーワードの提示がありました。

そのことを受けてですが、今年は自治会主催による子ども向け環境学習会に本校の生徒達が参加させて頂くという形でしたけれども、例えば今後は、本校では水質を浄化するいろんな取組を計画しておりますので、地域の子も達が本校に来て、生徒たちと一緒に調査・

研究を進めるとか、あるいは私たちが水環境改善のための実験装置ができればその性能を測定してもらおうとか、いろいろと共同で取り組めると思います。

また、これまでから水環境改善に関わって来られた方とか、高校生や子ども達、あるいは地域の年配の皆さんが、ああでもない、こうでもない議論する場が設置できると面白いのではないかと、今の話を聞きながら思いました。ぜひできればなと思ひまして、またこういった話を学校に持ち帰って検討してみようというふうにも思っております。

(会場から1)

このようなフォーラムが開催されたこと、地域の一住民として本当に喜んでおります。立命館の微生物を活用した水質浄化の実験についてですが、微生物は水温によって活性が変化しますので、調査には水温等を一項目加えてもらえたらと思います。

次に市長から、地球市民の森との一体開発との提案がありました。これには我々も非常に期待しております。大川に流れ込む川は無くなったのですけれども、雨水は流れて来る。それから、先ほどの法竜川からの導水や農業用水の利用など、いろんなアイデアがあると思うんですが、非常に難しいことではあります、やはり当初のかたち、放水路が出来る前のかたちに戻すということでは、野洲川の潟湖あたりから導水するアイデアも検討して頂きたい。

それから水の浄化については立命館の皆さんが豊富なアイデアをもって取り組まれております。その一方で、本市には旭化成株式会社という有力な企業があります。大川活用プロジェクトのような取組では「産・官・学」の連携が一つのパターンですよね。そういった意味ではここには残念ながらそういう産業、民間企業との連携がない。環境浄化という意味で様々な取組を展開している企業もあると思います。それら企業を誘致するというところまでやれば、市長として守山市の工業開発にこの琵琶湖を、また里湖を取り込むという壮大なプロジェクトを描ければ、大きなことですし、そういう産業界の力を利用することも必要だと私は思います。

地域住民、旧住民としては、大川との長い関わりの中で育んできた郷愁があります。新住民にとっては現在の大川の状態が見慣れた当たり前の光景であるとの意見もありましたが、大川という地域資源を活かすことで市全体の観光資源にもなりますし、いろんな意味の財産ということも考えながら、さきほどのように「産」ということも少し頭の中に描いて頂きながら、今後の取組を進めてほしいと思います。

もうひとつ、大川の取組も行政として税金を投入していくわけですので、「地域」という視点とともに、市全域での大きな視野からの判断、「守山の財産」、「滋賀の財産」としての大川のあり方、位置づけを考えながら、市長として取り組んでもらえればと期待します。

(宮本)

野洲川から大川へ水を誘導するには、堤防に穴をあけて導水する必要があるとか、非常

に難しい問題があり、実現困難だと思います。そこで別の方策で上手い方法を是非考えたいと思います。

次に「大きな視点」ということで、これは選挙の時からずっと申しておりますが、北部市街地の活性化には、地球市民の森から大川、湖岸にかけて良好自然環境や観光資源等の地域資源が点在しているのですが、この点になっているものを一つひとつ磨いて、これらをつなげることによって北部市街地を必ず活性出来ると思っております。

たとえば自転車でもっと利用しやすい環境を作るとかですね。地球市民の森から南側には「おうみんち」もあります。また湖岸にはラフォーレや琵琶湖リゾート等のホテルもあるわけですね。そういう一つ一つの点をつなぎ合わせてやることによって、この北部市街地をよりいっそう、活性化といいますか、皆さんにとって誇りを持てる地域に変えていけると確信しておりますし、そういう観点から市としては取り組みをさせて頂いています。産業界との連携ということでは、旭化成は途上国の水質浄化をプロジェクトとして実施しておられます。地元企業に参加頂くということも素晴らしい視点だと思います。そのようなことから、同社にはかなり前向きに対応頂けるのかなと思います。そこで、どういう形での関与が考えられるのかということでは、大川の水をポンプで吸い上げて浄化して循環するという取組だと旭化成さんの技術は生きると思うのですが、大きな装置も必要になることも予想されるので、今すぐそこまで進めていくことは困難です。どういう形の関与があるのか、ここは面白いところだと思います。

(伊藤)

様々な企業が水質浄化のための新しい技術を開発しており、日々進歩している分野ですから、そここのところを活かしていこうということでは、是非大川活用プロジェクトの中でしっかりと検討をしていきたいと思っております。

一方で立命館の発表の中で、浮島を作ってそこに水草を生やし、水中の窒素やリンを植物に吸収させながら、さらに魚などの生物や微生物を浮島の下で繁殖させていく実証実験の提案がありました。この発表には大変驚いたのですが、じつは自治会でも同様の取組を議論しておりまして、来年一回やってみようかというところまで話をしておりました。そういうことでは今日の話も含めて、どんどんと良い知恵を吸収しながら、できることをどんどんと実施していくのがこれからかなと思っております。

(会場から2)

この大川フォーラムで子ども達の話がありました。私もこの地域に転入してきたので綺麗な頃の大川を知りません。このフォーラムに出席し話を聞いて自宅に帰ったあと、子ども達に何を伝えたらいいのか？

私たちは環境や「地の記憶」を破壊してきた自覚があります。子ども達の世代も更に壊すかもしれない。一方で彼らはまっさらな新しい心をもっています。私にも汚された環境

でも、もう一度浄化しなければならないという気持ちもあります。

そのような中で、たとえば、新聞やテレビで何かの記事が出たとき、私たちはちらっと見ますけど、その後すぐに知識としては抜けおちてしまいますよね。そうではなくて、このフォーラムでも語られましたが、次世代への継承ということでは、今、自分がしなければいけないこと、ひとつでも家に帰って子ども達に伝えなければならない「知恵」はどのようなことなのでしょう。

(安藤)

「家に帰って子ども達に何を伝えるのか」ということですが、これは非常に大切な視点ですので、しっかりとお答えしていく必要があると思います。

私の答えはこうです。家に帰ったら私はこのように子どもに言います。

「今日、フォーラムに立命館守山高学校のお兄ちゃんとお姉ちゃんが来て発表をしていたぞ。彼らは大川の水質改善策に具体的に取り組んでいたぞ。お前もどうだ、考えてみるか？」それから、美崎の子ども達が水質調査に参加していますよね。もし自分の子供が参加していなかったら、「来年もあるようだぞ、お前も参加してみたらどうだ？」と言います。

また、大川の水が汚いという発言、魚釣りができないってという発言もありました。大人の方には、もっと積極的に大川について子どもと話をしてもらいたい。彼らが大川は汚いと思っているのか、まったく関心が無いのか。ですから、フォーラムが終わって、自宅に戻られたら、是非、今言ったような点を話題にして頂きたいと思います。

様々な考え方があると思います。会場から頂いた最初の意見と2番目の意見との兼ね合いについてですが、2番目の方の視点、それは「小さいことを大事にしていく」ということですが、これが本当に大切な視点なのです。しかし多くの場合抜け落ちてしまう。特に行政がトップに立って、トップダウンでやろうとした時にはまずそういう発想は出てきません。素晴らしいご意見だと思いますよ。「家に帰って何を話せばいいのですか？」この視点がなかなかでてこないのです。

大川活用プロジェクトの非常に良い点は、今までそういう形で意識されてこなかっただろう、「小さいことを大事にしていく」という視点が生きていることです。

小学生が評価する、それを伊藤さん達がとても大切にしている。私も本当はもっとトップダウンで迅速にやってもいいじゃないかと、一気に取組を進めたらいいじゃないかと思っていたのですが、そうではなくて、次世代の小学生、子ども達をまき込むということを常に意識し、そこに非常に苦心なさっている、恐らく2番目に質問された方に対する最も良い具体的な行動だと思います。

ですから、旭化成のような企業が入ることも非常に大切だと思います。この地域の将来を描くこともとても大切だと思います。でも、その中で私が大事にしてもらいたいのは、

非常に小さなこと、微々たることかも知れませんが、地域の中で皆さんが日常的にいろんな事を話せるような仕掛けを作っていくこと。もしくは、そういうテーマなりを見つけていくことであると、そのことが非常に大切なことだと思います。

ですから、2番目の方がおっしゃったように、我々は大人として子ども達の疑問に答えていく必要がある。そういうある種の緊張感があるとそれが、世代を引きついでいくことになるのではないかと思います。

それは、先ほどの私の講演でもお話したように、今の日本からは世代の連続性というか世代にわたる「土地の記憶」が無くなっている。そのことは子ども達が自分の将来を里（地域）の中にいながら描けないということに繋がっている。ですから、私たちは「子ども達に何を話せばよいのか」という問いに、これから一年間をかけて取り組んでいく必要があると思います。

最後に、美崎自治会長の伊藤さんに今後の取組についてお聞きします。

(伊藤)

まずはしっかりと組織を自治会に設置したいということですが、その際、その組織でどういうことを議論するかという整理はいると思います。

一つは水質問題です。先ほど市長から発言がありましたが、ご存知のとおり大川には生活用水や農業用水が流れ込んでいない。つまり汚濁物を流さないことによって綺麗にしようという答えは大川には無いのです。結局どこからか水持って来ないとダメという話になる。それがひとつのひとつのテーマだろうと思います。

二つ目は大川は地域の里川ということで、どうしたら皆が近づけるか、親しめるか、どうすれば実現できるのかそこを考えていくことがテーマです。

「自然に生えている藪がそのまま良いのか?」、「水辺に近づけるといのはどういうことなのか?」ということです。例えば、遊歩道や水上広場をつくったり、また、そこに「オープンカフェでもあったら使ってみたいね」みたいな。そういう大川に親しむための仕掛けづくり、そのところを議論することになると思います。

三つ目は環境学習の取組です。これは里川である大川を子ども達にどう近づけるか、どう伝えていくのかという話にもなるわけです。今年は水質調査と自然観測会ぐらいしかできなかった。「野洲川でんくうの会」に協力頂いて自然観察会を開催したのですが、もう少し広い視点で見ると、この地域は「オープンミュージアム」に使える地域なんです。地域には「水」があり「植生」があり、「琵琶湖」と「琵琶湖の魚」という多様な自然要素があります。これ自体がミュージアムの要素になる。この視点をもってこの地域をどう活かすのが重要ですので、しっかりと議論をして行きたい。

そのためには、今後アンケートをしたり、様々な場面で意見交換のための機会をもうけたり、大川の未来を子ども達に絵に描いてもらう取組があったりとか、たぶん、いろんなアイデアがあると思います。そんなことを議論できたらいいなと思っております。

(宮本)

2番目にご発言頂いた方への私なりの思いですけれど、今、大川というのは川沿いをずっと歩いて見えるわけではありません。本当に自治会館やさざなみ街道の方からちらっと見るぐらいしかできない訳です。

ぜひ大川に普段から親んでもらいたい。例えばちょっと大川へお孫さんと散歩とか。また、大川も外来魚が多いという発表がありました。私も大川以外で経験があるのですが、外来魚はミミズ等のえさで簡単に釣れます。赤野井湾で釣りをしたのですが、えさを投入した瞬間にブルーギルが食いついて、10秒もほっておくと胃まで針ごとえさを飲み込んでしまうほどで、本当に生命力の強い、言い換えれば外来魚はそれぐらい繁殖力が高い。そこで、お孫さんと「ちょっと大川にブルーギル釣りにいこう」と誘って頂いて、多分ものすごく釣れると思います。そのようなことから大川に興味をもって頂き、大川の環境がどうなっているかという話を子ども達として頂きたいと思います。

昔の野洲川の写真が、市の資料にほとんど残っていない。探してみても今日お見せしたこの航空写真ぐらいしかありません。

おそらく、昔の野洲川はよく溢れる、洪水になって被害を及ぼす川でしたから、皆さんにとってあまり良いイメージがない河川だったのでしょうか。ですから、写真がほとんど残っていないのだと思います。

将来の大川をどうするか考えるために、地域の方々、美崎、速野、中洲の方々に是非お願いしたいのですか、昔の野洲川のイメージをまとめて頂きたいのです。たとえば昔の風景写真を集めて頂くとか、「このへんの昔はこんな感じやった」という話をまとめて頂くとか、そういう取組を通じて、共有できる昔の姿を取りまとめて頂きたいと思います。

(事務局)

パネラーの皆様、本日はどうもありがとうございました。それでは、大川フォーラムはこれで終了させていただきます。

今日のフォーラムがこれからの大川を考えるきっかけになればと考えております。

会場の皆様、本日はありがとうございました。これで終わらせて頂きますが、今後とも大川活用プロジェクトによる様々な取組にご参加、ご協力頂きますよう重ねてお願いいたします。

資料

大川フォーラム

「里川・里湖のまちづくり」から ～住民・研究・行政の協働～

1 企画意図

市内北部に位置する準用河川大川については、平成 23 年に美崎自治会、京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所、(以下「ユニット」。)立命館守山中学校・高等学校(以下「立命館」)および守山市で構成する「大川活用プロジェクト」を立ち上げ、共同で策定した「里川・里湖(うみ)のまちづくり計画(以下「計画」)」に基づき、地域住民による水草除去や環境学習会の開催、ユニット、立命館による環境調査。更には情報紙「大川だより」の発行等を4者が連携する中、実施してきたところである。

この取組を通じて地域住民の大川への関心は高まっており、今回、フォーラムを開催することで、更なる大川への関心の醸成に努めるとともに、大川を活用したまちづくりを考える「きっかけ」とするものである。

なお、フォーラムを通じた、「そと(部外者、海外等)」の視点による大川の再評価も目的のひとつ。

記

- 1 主催 大川活用プロジェクト(美崎自治会、ユニット、立命館および守山市)
- 2 対象者 大川の取組に関心のある市民(但し、地域住民を中心とする)
- 3 日時・会場・定員
平成 23 年 12 月 3 日午後 2 時から 2 時間程度 美崎自治会 2 階 会議室 定員 80 名
(地域住民 60 名、その他 20 名 先着申込順)
- 4 当日進行
 - (1) 基調講演(30分) 講師:ユニット 安藤和雄准教授
「(仮題)ひとの営みに寄り添う川～アジアの視点から見た大川の取組～」
 - (2) 事例報告(45分) 「大川活用ユニット」の取組から
 - ・自治会(15分) → 水草除去や環境学習を通じたまちづくり活動
 - ・立命館 SCi-Tech クラブ生物班(15分) → 水環境調査の取組から
 - ・ユニット(15分) → 国内同様事例報告
 - (3) パネルディスカッション(45分) 参加者 市長、美崎自治会長、安藤(ユニット)
「(仮題)大川ではじめる里川・里湖のまちづくり」
 - ・話題提供→9月に自治会が実施した住民アンケート結果(現在分析中)
- 5 その他
 - (1) 広報 12月1日 市広報および市HPへの掲載
 - (2) 当日は自治会による「むかしの大川写真展」を同時開催予定

参加費
無料

大川フォーラム

「里川・里湖(うみ)のまちづくりから
～住民・研究・行政の協働～」

主催：大川活用プロジェクト

とき 12月3日(土) 午後2時から4時まで

ところ 美崎自治会館
(今浜町 2761-35 TEL:585-1019)

美崎自治会、京都大学生存基盤科学研究ユニット、立命館守山高等学校、市で構成する大川活用プロジェクトでは、市内北部を流れる大川を舞台とし、河川の環境保全とまちづくり活動に取り組んでいます。これまでの活動発表とともに、さまざまな視点を取り入れる中、地域にとっての大川の価値を見つめなおし、今後のまちづくりを参加者の皆さんとともに考えるフォーラムを開催します。

定員80名
(先着順)

基調講演 「自然とともにある暮らしと地域おこし-アジアの農村開発からみた大川の取組-」
講師：安藤和雄准教授(京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)

事例報告 「大川活用プロジェクト」の取組から

- 美崎自治会：水草除去や環境学習を通じたまちづくり活動
- 立命館守山高等学校 SCI-Tech クラブ生物班：水環境調査の取組から
- 京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所：国内外同様事例報告
「世代を超えた地域づくり ～伝統や文化の保存を通して～」

パネルディスカッション 大川ではじめる里川・里湖のまちづくり

パネリスト：伊藤潔美崎自治会長／宮本和宏守山市長／安藤和雄准教授

申し込み・問い合わせ

市役所環境政策課 TEL:582-1154 (申し込みは12月2日(金)午後5時まで)

平成 23 年度版

里 川 里 湖^ろのまちづくり 計 画 書

大 川 活 用 プロジェクト

美 崎 自 治 会
京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
立命館守山中学校・高等学校
守 山 市

『私たちの里川里湖の創生をめざして』

安藤和雄(京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)

大川を地域おこしとして活用しようとプロジェクトが発足しました。はじめての会合で、会のメンバーから「夏休み子どもたちが遊べ、夏休みの宿題ができる川」をめざしてはどうかという具体的な提案がありました。このキーワードをはじめに、是非、美崎自治会の皆さん、関係者の誰もが共有できる再生した大川の具体的なイメージを発展させ、目的を設定し、美崎町自治会のリーダーシップのもとに実践活動を粘りつよく継続していきましょう。

ホテイアオイやヨシが繁茂している現在の大川を、野洲川の本川の一部であった時の水質や景観に戻したいという美崎自治会の皆さんのこれまでの活動や願いが、本プロジェクトの推進力の源です。そして、その推進力を一段とギアアップしていくためにも、大川の水がどのように汚れているのか、また汚れているとしたら、いかに美しくしていくのか、また、景観を昔に戻すことの意義や用途はなんなのか、こうした諸点について、住民の方々、行政がしっかりと共有していくことが重要です。

例えば水質について、一つの基準を設定することも可能かと思えます。大川で育った魚を安心して食べることができるという基準です。村(里)の川である里川の大川で獲った魚を食卓にあげることも珍しくなかったことでしょう。食の材料と遊びをかねたところが里川として大川の原点にはあることでしょう。風景については、大川の土手などで育った樹木や、河川内のヨシが暮らしの中でも使われてきたことでしょう。大川の景観も暮らしと密接に関係することで、維持されてきた景観であったといえるのではないのでしょうか。

したがって、大川を生きた里川として再生したいといった場合、どうしても取り組まなければならないのは、大川が昔、生活の一部としてどのように使われ、そこから採集される魚、植物等々の資源と利用、採集の仕方、遊びの種類、管理方法などを、地域の住民の方々の参加を得て、一つひとつ明らかにする作業です。大川の里川としての具体的な内容を皆さん自身がしっかりとつかんで、向かうべき再生のゴールの具体的な地点を共有していくことで、活動にはずみがつきます。そこで、平成 23 年度の活動の柱の一つをこの作業にあてることにしました。いまでは利用も少なくなりましたが、大川の河口を形成する琵琶湖沿岸のヨシ帯や雑木林は美崎の人々にとっても重要な自然資源であったはずですが、したがって、湖畔のヨシ帯や雑木林帯とその周辺の水辺を里湖と位置づけ、具体的な里をつくっている里川、里湖のイメージを美崎の皆さんや関係者がしっかりとつくっていきましょう。

里地里山が、今、日本で地域おこしの一つのブームとなっています。私は、守山市、特に美崎では、「私たちの里川里湖の創生」を地域おこし、本プロジェクトの理念としてはどうかと考えています。

守山のいくつもの泉を源とする小川や野洲川の支流と琵琶湖がつくる野と川の景観は、里川里湖の日常世界として規定されることではっきりと位置づけられます。そして、里川里湖の自然は、水やその他の動植物資源を積極的に暮らしや遊びにあり日常的に利用されることで人々の暮らしに馴染んできました。こうしたことを背景に、守山では、大小河川と琵琶湖湖畔がつながる内陸のデルタ(三角州)地形と生態が基盤となったどくとくの里川里湖空間を歴史的にもつくってきたのです。

本事業が守山の自然と人々の新たな関係をつくっていく上で一つモデルを示すことができれば幸いです。

1 「里川^{うみ}里湖のまちづくり」の進めかた

かつて大川は地域に密着した河川でした。そこでは生活のための漁「おかずとり」が行なわれ、また、地域の子も達が川と戯れる光景が日常的に見られました。

しかし、社会や生活が変化する中、このような関係性は薄れています。また、野洲川改修によって流入水が激減したことで、過去のような流れがなくなってしまう、水草が繁茂する内湖のような状態になっています。

私たちは大川について今後のあり方を検討するにあたり、まずは現在の大川のもつ様々な側面、たとえば「景観」や「水質」、「生物環境」、更には地域の中で大川がどのような役割を担ってきたかをしっかりと見定め、再評価することが重要であることにしました。

そのことによって、「里川」としての大川に新たな価値を見出し、「里湖」である琵琶湖、とりわけ河口部に広がる葦帯や湖辺地帯、更には様々な地域資源とともに、どのようなまちづくりが出来るかをじっくりと考えることにしました。

なお、取組については地域の皆さんを中心とし、学術機関、行政等様々な主体の連携によって進めることを基本とします。

(1) 大川のもつ多様な価値をしっかりと評価します(期間:平成 23 年度から)

- ・ 水質や生物等の科学的調査とともに、地域の中で大川がどのように意識されてきたかを調査します
- ・ また、大川への関心を高める取組も幅広く実施します
- ・ 水草除去等、環境保全には継続して取り組みます
- ・ 実証実験等を通じて改善手法を検討します。また、関係機関等への働きかけを行ないます

(2) 大川を活用したまちづくりについて考えます(期間:平成 25 年度まで)

- ・ 大川や周辺環境を活用したまちづくりの将来像をつくります
- ・ その中で水環境改善目標も取り決めます。
- ・ 具体的な取組を全体構想として取りまとめます。また、その作業工程も明確にします

(3) 全体構想に基づく具体的な取組を推進します

- ・ 地域・行政・学術機関がそれぞれの役割を分担し、協働で取組をすすめます
- ・ 必要に応じて検証を行い、取組を見直します

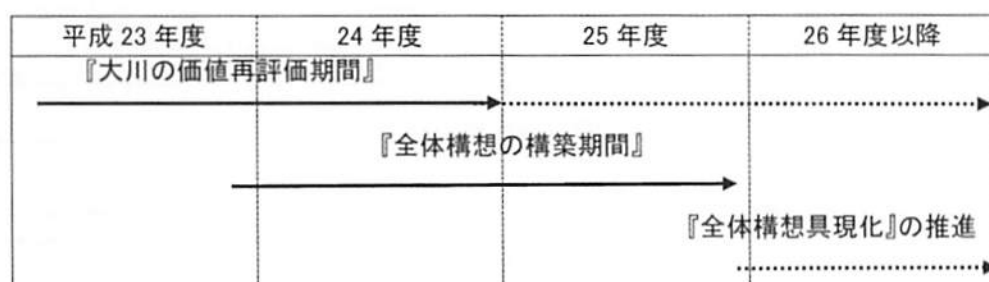


表 全体スケジュール(案)

2 平成 23 年度の取組

(1) 各種調査の実施

- ・ 水質調査（実施主体 守山市）
- ・ 底生生物・水質調査（立命館守山中学校・高等学校）
- ・ 流入水量調査（シミュレーション含）（京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所）

(2) 啓発活動等の実施

- ・ 住民参加のプロセスづくり（京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所）
- ・ 地域住民や子ども達の大川への関心醸成のための各種取組（美崎自治会）
- ・ 水をテーマにした国際交流（立命館守山中学校・高等学校、
京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所）
- ・ 大川水フォーラムの開催（美崎自治会、守山市）

(3) 環境保全の実施

- ・ 水草の定期的除去（美崎自治会）

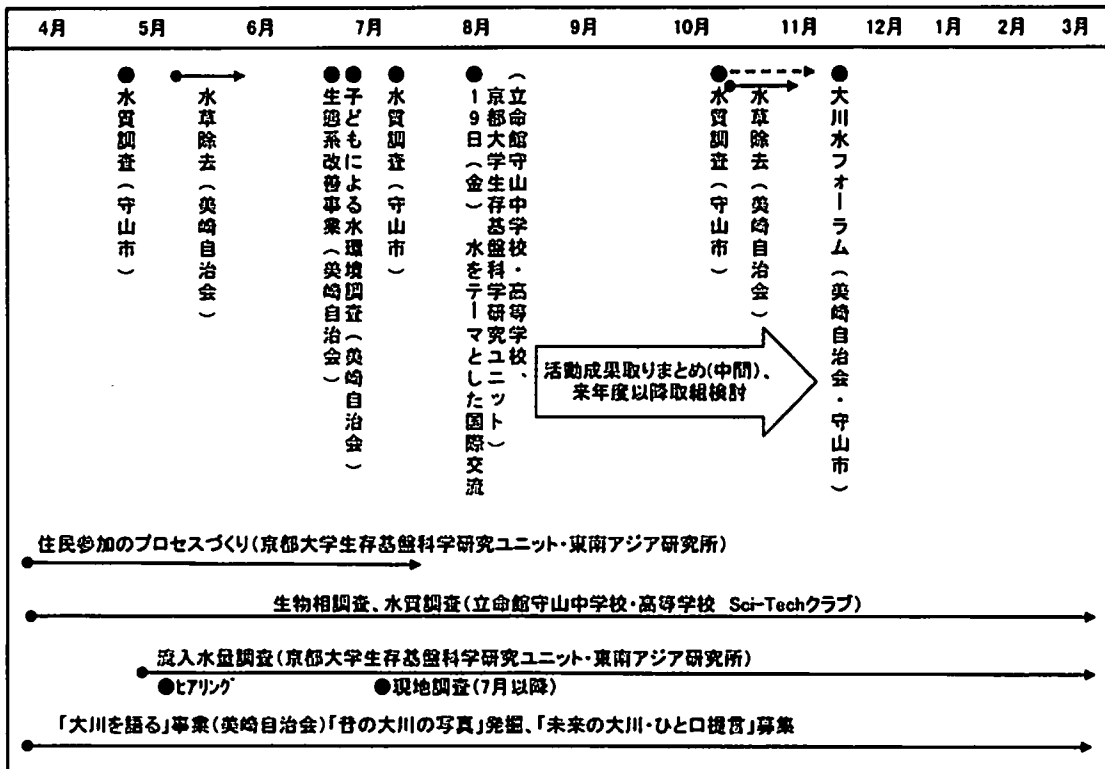


表 平成 23 年度の取組スケジュール

3 取組毎の概要

(1) 各種調査の実施

○ 水質調査

① 実施主体 守山市（担当：環境政策課）

② 目的

- ・ 大川の水質の現状把握とともに、水草除去による効果を計測するための水質調査を実施し、今後の取組の基礎データとする

③ 具体的活動内容

- ・ 委託業者による水質調査（PH、BOD、COD、SS、T-N、T-P、DO）
- ・ 調査は測地点毎（上流、中流、下流）の差異や季節変動を明確にするため、3箇所を年3回実施する

④ 実施時期(予定) 5月（水草除去前）、7月（水草除去後）、10月以降

○ 生物相調査(底生生物・プランクトン・魚類・水草)、水質調査

① 実施主体 立命館守山中学校・高等学校 Sci-Tech クラブ

② 目的

- ・ 大川の生物相と水質の現状を把握し、季節によってどのように変化するか、水草除去による変化についても調査し、守山市と連携して調査する
- ・ 生物相について一定の把握ができたところで、特定の生物に注目した研究を行い、「大川水フォーラム」やほぼ隔年で実施される「高校生国際みずフォーラム（IWF）」等で発表を行う。また、関連の諸取組に積極的に参加する意識を高める

③ 具体的活動内容

- ・ 月1回の頻度で水質調査を行い、3ヶ月に1回程度生物相調査を行う。調査場所は自治会館横、ピエリ前、ラフォーレ横、中洲、琵琶湖岸の5箇所。専門家の指導を適宜受けながら実施する

④ 実施時期(予定)

- ・ 水質調査 4月16または23日、5月14日 6月18または25日、7月23日
8月(日未定)、9月10日 10月15日 11月19日 12月17日
1月21日、2月25日、3月24日
- ・ 生物調査 4月16または23日、6月18または25日 8月(日未定)
11月19日、2月25日

○ 流入水量調査

① 実施主体 京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所

② 目的

- ・ 大川に農業用水を導入した場合、どの程度の流入水量が期待でき、また、大川に滞留する水がどの程度排出されるのかを、シミュレーションモデルを用いて予測する

③ 具体的活動内容

- ・ シミュレーションの専門家に対するヒアリング調査並びに、シミュレーションモデルに必要な現地データの取得

④ 実施時期(予定)

- ・ 5月（ヒアリング調査）、7月以降（現地調査）

(2) 啓発活動等の実施

○ 住民参加のプロセスづくり

- ① 実施主体 京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
- ② 目的
 - ・ 大川の現状に対する意識と今後の大川のあり方について、地元の人々が自ら問題点を発見し、その解決に向けて参加するためのプロセスを形成する
 - ・ また、自治会・行政・地元高校・大学が、具体的な里川・里湖のイメージを共有するための出発点とする
- ③ 具体的活動内容
 - ・ P L A（参加型学習行動法）やP R A（参加型農村調査法）の手法を用い、美崎町自治会の人々が知識やアイデアを出し合う場を設け、かつての大川が地域の生活とどのように関わってきたのかを明らかにすると共に、大川活用の用途や意義についての考えを共有する
- ④ 実施時期(予定) 4から7月(月 1-2 回程度)

○ 地域住民や子ども達の大川への関心醸成のための各種取組

(取組 1) 子どもによる水環境調査(イベント)

- ① 実施主体 美崎自治会（参加者：小学校高学年を中心とした子ども達とその保護者）
（協力）立命館守山中学校・高等学校 Sci-Tech クラブ（TA として）
- ② 目的
 - ・ 子ども達主体の水環境調査を実施することで、環境学習の機会を提供するとともに、地域への関心と愛着の醸成を図る。また、経年的にデータを蓄積し、大川の変化を把握する
- ③ 具体的活動内容
 - ・ 水質調査
 - ・ 底生生物(生物指標)調査
 - ・ 大川周辺の植生調査
- ④ 実施時期(予定) 7月上・中旬

(取組 2) 生態系改善事業(イベント)

- ① 実施主体 美崎自治会（参加者：自治会員）
- ② 目的
 - ・ 外来魚つり大会や在来魚の放流を実施することで、地域での大川への関心を高めるとともに、生息魚類の生態系改善にチャレンジする
- ③ 具体的活動内容
 - ・ 外来魚つり大会
 - ・ 在来魚の放流
 - ・ 刺し網による生息魚類の調査
- ④ 実施時期(予定) 7月上・中旬

(取組 3) 「大川を語る」事業

- ① 実施主体 美崎自治会 (参加者: 自治会員)
- ② 目的
 - ・ 子どもから高齢者まで地域の多様な住民が大川を語り合うきっかけやテーマとなるよう、昔の大川の写真発掘や未来の大川への提言を募集する
- ③ 具体的活動内容
 - ・ 「昔の大川の写真」発掘事業
 - ・ 「未来の大川・ひと口提言」募集事業
- ④ 実施時期(予定) 通 年

○ 水をテーマとした国際交流

- ① 実施主体 立命館守山高等学校 Sci-Tech クラブ、
京都大学生存基盤科学研究ユニット
- ② 目的
 - ・ 立命館守山高校 Sci-Tech クラブと E³ (イーキューブ ESS) の生徒と水環境調査で連携しているシンガポールの Commonwealth Secondary School の生徒や、研究ユニットならびに東南アジア研究所に關係のミャンマーの方々と、「里川」、「里湖」という人々の暮らしと密着した水環境のあり方などについて交流を深める
- ③ 具体的活動内容(案)
 - ・ それぞれの団体での活動の交流
 - ・ 琵琶湖博物館や西の湖の見学など
- ④ 実施時期(予定) 8月19日(金)

○ 大川水フォーラム

- ① 実施主体 美崎自治会、守山市 (参加者: 市民オープン)
- ② 目的
 - ・ 大川への市民の関心醸成を図るとともにこれまでの活動を報告する場として、また、今後の大川のあり方を考える場として、フォーラムを開催する
- ③ 具体的活動内容
 - ・ 活動報告
 - ・ これからの大川のあり方についての意見交換
- ※ 具体的な内容、パネリスト、広報手法については、夏を目処に決定する。なお、会場については、美崎自治会館を予定
- ④ 実施時期(予定) 11月下旬

(3) 環境保全の実施

○ 水草の定期的除去

① 実施主体 美崎自治会（参加者：自治会員） ※守山市委託事業

② 目的

- ・ 繁茂する水草を除去することで景観改善に資するとともに、住民自身が作業を行なうことで大川への関心醸成に努める

③ 具体的活動内容

- ・ ホテイアオイ等、大川に繁茂する水草の除去。なお、除去した水草については、堆肥化の検討も行なう

④ 実施時期(予定) 5月上旬～6月上旬、10月下旬～11月上旬で3回実施

※ 具体的な実施手法、時期は4月17日(日)に試行的に除去作業を実施した上で決定する

大川についてのアンケート 分析結果

美崎自治会

(平成 23 年 10 月実施)

大川についてのアンケート 分析結果

調査の概要

1 調査の目的

現在、美崎自治会、京都大学生存科学基盤研究ユニット・東南アジア研究所、立命館守山中学校・高等学校および守山市で進めている「大川活用プロジェクト」での今後の議論の基盤とするため、美崎自治会住民に対し、現在の大川に対する認識、取り組むべき課題および今後の方策等に係るアンケートを実施したもの。

2 設 計

(1) 調査対象

美崎自治会住民

(2) 調査方法

自治会行事の際に協力依頼

(3) 実施日時

平成 23 年 9 月～10 月

3 設問内容

- 現在の大川への認識
- 大川で当面取り組むべき課題
- プロジェクトや「計画」づくりに重要な取組
- 大川および周辺資源を活用した地域活性化策（自由記述）

4 回収量

95 枚を回収。

5 留意事項

回答率%は小数点第2位を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。

アンケート分析結果

問1. 今の大川をどのように感じますか。当てはまるものから3つ、○をつけてください。

現在の大川について、どのように感じているかを聞いたところ、「水草が多く水質も悪いと感じる」が 30.5%最も高く、「大川は見苦しいと思う」10.2%と合わせて約 40.7%が大川への悪い印象を持っていることがわかった。

一方、第2位の「地域の大切な資源だと思う」が 28.9%、第3位の「大川や周辺の景観は魅力的と思う」が 14.4%と、大川に対して好印象を持っている回答も 43.3%あった。

また、「もといいた魚に代わり外来種が多い」は 11.8%、「大川に興味がない」は 3.2%であった。

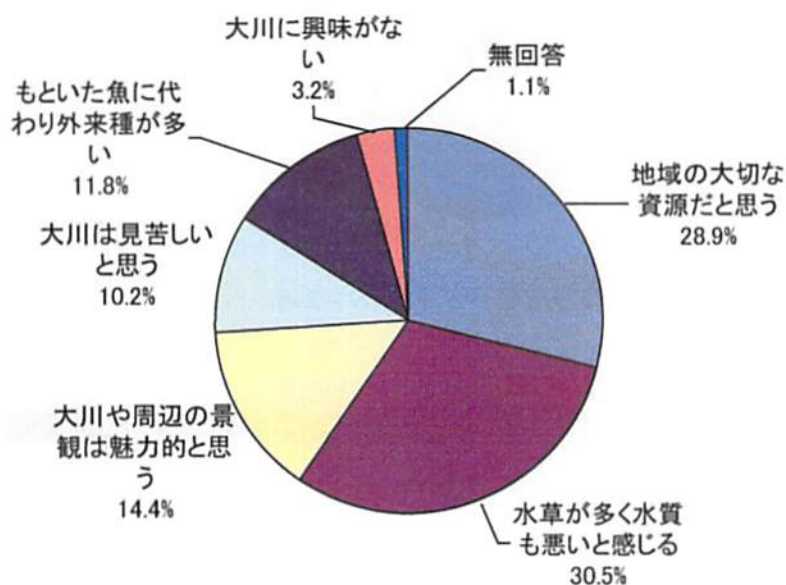


図1 現在の大川への認識(N=187)

問2. 自治会では守山市とともに大川環境改善に取り組むことにしています。
 あなたは何から取り組むべきと思われますか。当面大事と思われる順に1から3
 までの番号を記入してください。

大川環境改善を図るため当面取り組むべき課題を、その優先順位とともに聞いたところ、全体では「水質の改善」が30.7%と最も高く、次いで「水草の除去」27.0%、「ゴミ掃除」23.8%、「周辺景観の改善」11.5%、「外来生物の駆除」5.3%となった。

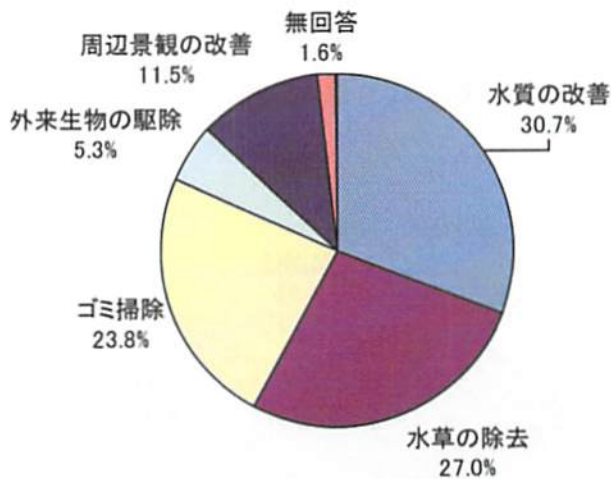


図2 当面取り組むべき課題(N=244)

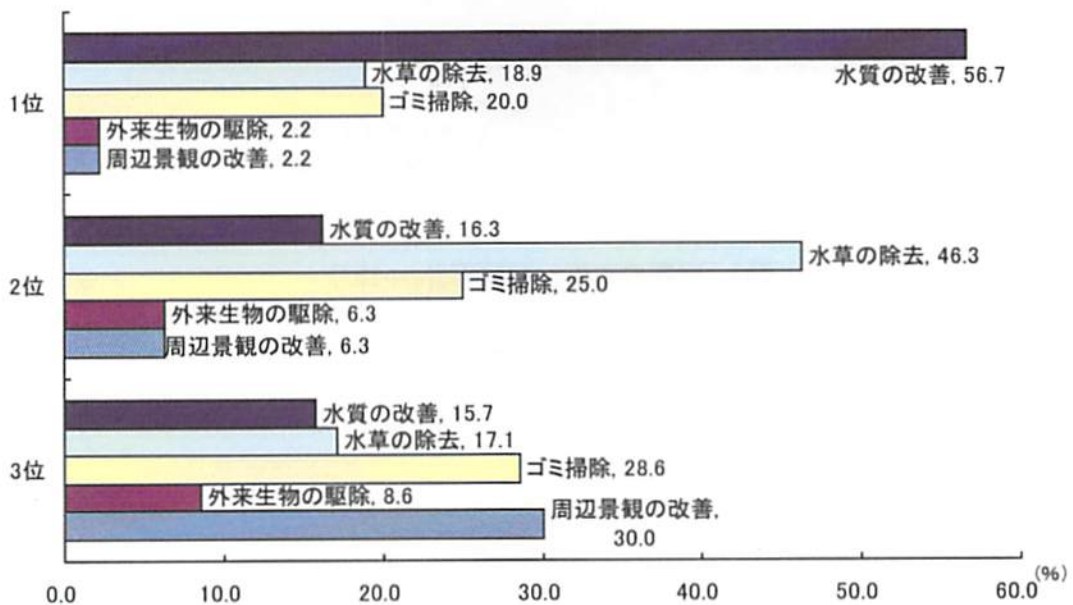


図3 優先順位ごとの当面取り組むべき課題(N=244)

次に優先順位1位の取組では、まず最初に取り組むべき事項として、「水質の改善」をあげている割合が56.7%と最も高く、次に「ゴミ清掃」20.0%、「水草の除去」18.9%となった。

一方、優先順位2位では、「水草の除去」46.3%、「ゴミ清掃」25.0%、「水質の改善」16.3%、「外来生物の駆除」と「周辺環境の改善」が6.3%と続き、第3位では「周辺環境の改善」が30.0%、「ゴミ清掃」28.6%、「水草の除去」17.1%、「水質の改善」15.7%、「外来生物の駆除」8.6%となった。

このことから、概ね「水質の改善」、「水草の除去」、「ゴミ清掃」等の環境改善策について優先して取り組み、その後「周辺環境の改善」に取り組むべきであるとの認識が住民の中にあることがわかった。

その他の提案

- ・ 根本的な改善、地質など
- ・ ヘドロを取り除く
- ・ 取組は地域住民、特に子ども達をまき込んだものとしたい
- ・ スポットのモデル箇所を作る。水中にプロペラを回して水の流れを作る。土手は竹を切り桜等を植えて美しくする

問3. 今後、大川活用プロジェクトや「計画」づくりを進めていく上で、どのような取り組みが重要とされますか。優先順位の高いものから順に1から3までの番号を記入してください。

プロジェクトや「計画」づくりを進める上で重要な取組を、その優先順位とともに聞いたところ、全体では「自然観察や水質調査などの環境学習」が30.7%と最も高く、次いで「より多くの参加を得ての掃除などの実践活動」29.8%と、大川での実践活動が重要と考えている割合が約60%あることがわかった。次いで「皆で語り合う場や機会づくり」21.5%、「関心を高めるための絵画や写真の募集」13.6%となった。

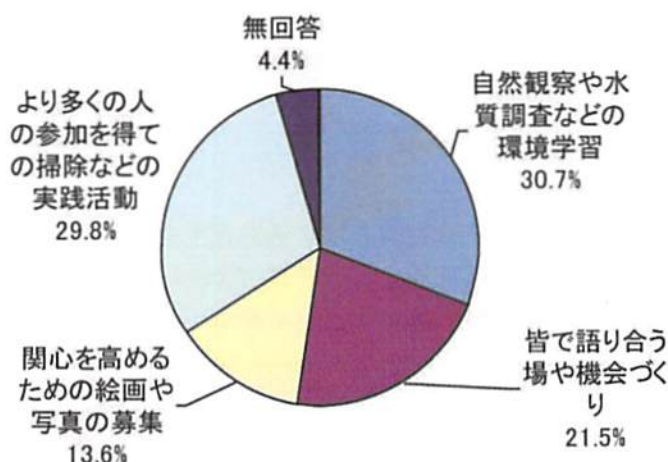


図4 プロジェクトや「計画」づくりに重要な取組 (N=228)

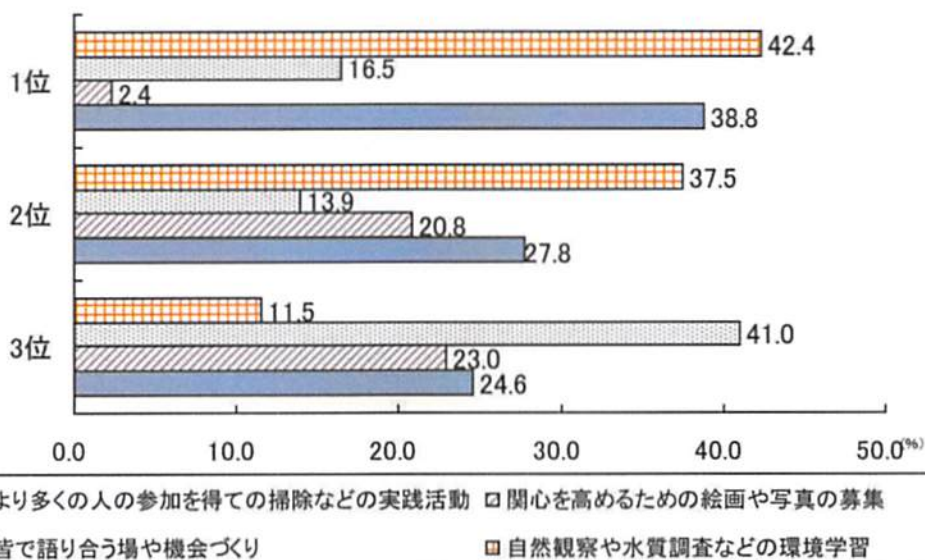


図5 優先順位ごとにプロジェクトや「計画」づくりに重要な取組 (N=228)

次に優先順位1位の取組では、最も重要な取組として「自然観察や水質調査などの環境学習」をあげている割合が42.4%と最も高く、次に「より多くの人参加を得ての掃除などの実践活動」が38.8%と続き、80%を超える回答が大川での実践活動が第1に重要と考えていることがわかった。次いで「皆で語り合う場や機会づくり」16.5%、「関心を高めるための絵画や写真の募集」2.4%となった。

一方、優先順位2位の取組では、1位と同じく「自然観察や水質調査などの環境学習」37.5%、「より多くの人参加を得ての掃除などの実践活動」27.8%、「関心を高めるための絵画や写真の募集」20.8%、「皆で語り合う場や機会づくり」13.9%と続き、第3位の取組では「皆で語り合う場や機会づくり」が41.0%と最も高く、次いで「より多くの人参加を得ての掃除などの実践活動」24.6%、「関心を高めるための絵画や写真の募集」23.0%、「より多くの人参加を得ての掃除などの実践活動」11.5%となった。

このことから、まずは「環境学習」や「清掃」等の実践活動に取り組むべきという考えが住民の中にあることがわかった。

その他の提案

- ・ 先の答と同様、やはり子ども達をまき込みたい
- ・ ベンチ、ボートを設置してはどうか
- ・ どんぐり銀行のようなものを考えてはどうか(どんぐりを活用した住民参加型の森づくりの取組)

問4. 大川の周辺は、琵琶湖とともにリゾート施設や「地球市民の森」、「おうみんち」など魅力ある資源があります。そのようななかで、大川を含むこの地域をどのように活かしたらいいと思われますか。

その他も含め、あなたの自由なご意見をお聞かせください。

最後に、大川および周辺資源を活用した地域活性化策等について、自由記述で意見を求めたところ、大川周辺環境の整備に係る意見が4件あった。

そのほか、大川の水（辺）環境の保全・改善を求める意見が3件、イベント等の実施が2件、今後の取組には住民主体のプロセスが重要であるとの認識を示す意見が2件、その他の意見が5件あった。

全般的には大川については概ね地域主体の緩やかな整備、活用、保全が相応しいとの内容であった。

表1 大川および周辺資源を活用した地域活性化策(自由記述)

大川周辺環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大川そのもの環境整備に続き、周囲（兩岸の整備）も同時進行にて、果樹公園（地球市民の森に隣接して）親水公園づくり ・ 大川自然遊歩道設置 ・ 子どもの声が聞こえてくる環境整備 ・ 安全に川にアクセスできる場をつくる
水（辺）環境の保全・改善	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大川は水景としての価値、地球市民の森に続く自然公園としての価値、生態系保全池としての価値など極めて大きい可能性がある。どう生かすか十分な議論を望む ・ やがて草木が大きく成長し視界悪く安全性が保たれない。管理不足 ・ 水質が悪い。もっと改善できないか
イベント等の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・ イベント計画、ライブ（音楽等）の実施 ・ 催し物等どんどん実施してはどうでしょう
住民主体による取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 周辺地域住民がもっともっと共感し共に作業することが大切である ・ 新しく生まれたものも大切だと思いますが、大川のように、それぞれ住民の思い出が残るものは、「昔があり今がある」題材にも必要と思う
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ モデル箇所を設けて良ければ拡大して行く ・ みんなが楽しんで遊べる場所に、この大川がみんなが誇りに思える様な所に ・ 地球市民の森は規模縮小の上、予算を環境保護に回すべき ・ 守山駅周辺のように“ホテルが住める街づくり”に活かしたらいいと思います ・ 土居さんの石碑のことも考えてほしい

大川についてのアンケート

自治会と守山市は、京都大学や立命館高校の皆さんの協力を得ながら、大川の環境改善や活用方策の計画を平成 23、24、25 年度の 3 ヶ年をかけて策定することになっています。つきまして、その計画に美崎の住民の皆さんの意見を反映したいと思います。下記のアンケートへのご協力をお願いします。

美崎自治会

1. 今の大川をどのように感じますか。当てはまるものから3つ、○をつけてください。

- ①地域の大切な資源だと思う ②水草が多く水質も悪いと感じる
③大川や周辺の景観は魅力的と思う ④大川は見苦しいと思う
⑤もといいた魚に代わり外来魚が多い ⑥大川に興味がない

2. 自治会では守山市とともに大川の環境改善に取り組むことにしています。あなたは何かから取り組むべきと思われませんか。当面大事と思われる順に1から3までの番号を記入してください。

- ①水質の改善 () ②水草の除去 () ③ゴミ清掃 ()
④外来生物の駆除 () ⑤周辺景観の改善 ()
⑥その他の取り組みについて提案があればご記入ください。

[

]

3. 今後、大川活用プロジェクトや「計画」づくりを進めていく上で、どのような取り組みが重要と思いませんか。優先順位の高いものから順に1から3まで番号を記入してください。

- ①自然観察や水質調査などの環境学習 ()
②皆で語り合う場や機会づくり ()
③関心を高めるための絵画や写真の募集 ()
④より多くの人参加を得ての清掃などの実践活動 ()
⑤その他の取り組みとして提案があればご記入ください。

[

]

4. 大川の周辺は、琵琶湖とともにリゾート施設や「地球市民の森」「おうみんち」など魅力ある資源があります。そのようななかで、大川を含むこの地域をどのように活かしたらいいと思われませんか。

その他も含め、あなたの自由なご意見をお聞かせください。

大川だより

第1号(平成23年6月1日発行)

発行：大川活用プロジェクト

(事務局 守山市湖岸振興検討会)

大川の将来像をともに考えていきましょう



自治会館から大川を望む(本年5月)

パリとセーヌ川、京都と鴨川、ローマとトレビの泉などはあまりに有名ですが、世界の多くの魅力あるまちには必ずといっていいほど川や水辺があります。

美崎もかつてはそうでした。大川には豊かな水流と川原があり、子ども達は水遊び、大人たちは投網打ちに興じました。無論たびたび洪水に襲われましたが、それも大水の時に橋板を撤去する木造の大川橋の存在とともに多様な関わりの一つの側面でした。

しかし、野洲川新川の通水とともに水は澱み、水草が繁茂する川となり、いつしか大川は人々と関わりのない忘れられた存在となりました。

今、大川の環境改善に取り組むとき、昔の姿の再現を目標とすることは現実的とは思えません。川原はなく、閉鎖的な水面となっていること、滋賀を代表する景勝地に位置し、周辺には大型ホテルやショッピングセンターが立地しているなどの現状を踏まえ、大川の持つ可

美崎自治会長 伊藤 潔

能性を見出しつつ、人々との新しい関わりの構築や魅力づくりが目標になります。

では、それはどんな姿なのか。まだ描けていませんし、モデルもありません。これから知恵を出し合い、議論をしていくなかで創り上げていく課題といえます。幸い守山市のご尽力で、京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所や立命館守山中・高校の皆さんとプロジェクトを組むことが出来ました。連携し、また助力をいただきながら一步一步進めていきたいと考えています。

さらに、今回の取り組みを通じて地域への関心が高まり、住民が一体となって全体的なまちづくりへと活動が広がることや、子ども達が環境への関心を高め、ふるさと意識を持つことになれば素晴らしいと思っています。

皆様のご理解、ご協力をお願いします。



地域の力で水草刈りを実施(4月17日)

「里川^{うみ}里湖のまちづくり」

大川活用プロジェクトが発足、様々な取組が動き出しています

美崎自治会、京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所、立命館守山中学校・高等学校および守山市によるプロジェクト「里川里湖(さとうみ)のまちづくり計画」が動き出しました。

大川は、地域に密着した河川であり、守山市北部における大切な地域資源のひとつです。本取組は大川の環境保全とともに、河川環境を活用したまちづくりについて、しっかりと検討し、実現していくことを目的としています。

昨年から地域と市の共同による水草除去を実施し、京大ユニット、立命館も交えた現地調査や話し合いを重ねています。今年度、今後の長期にわたるこの取組の推進母体として、4者による枠組「大川活用プロジェクト」を立ちあげ、正式なプロジェクトとして位置づけました。既に完成している大川の船着場やこの「大川だより」の発行もこの取組のひとつです。

このプロジェクトでは大川を地域の暮らしに密接に関係している「里川」として、また、大川の河口を形成する琵琶湖沿岸のヨシ帯や雑木林とその周辺の水辺を「里湖」として再定義しています。

大川のもつ様々な側面、たとえば「景観」や「水質」、「生物環境」、更には地域の中で

大川がどのような役割を担ってきたかをしっかりと見定め、再評価することから取組をスタートさせます。

そのことによって、「里川」としての大川に新たな価値を見だし、「里湖」としての琵琶湖、更には周辺の様々な地域資源とともに、どのようなまちづくりが出来るかをじっくりと考え、一つひとつ実現していこうと思います。

なお、本年度は立命館や京大ユニット、守山市を主体とした環境等の基礎的な調査、自治会を中心とした大川への関心醸成のためのイベントやフォーラム等の実施、更には水草除去を中心に進めてまいります。

それぞれの取組については、この「大川だより」のほか、自治会や市の広報等を通じてお知らせしますので、ぜひご参加ください。

(守山市みらい政策課 木村)



立命館による水質調査のようす(5月14日)

メンバーコラム第1回「大槌町で活動してきました」 (守山市環境政策課 林)

4月19日から7日間、先の東日本大震災による津波で大きな被害を受けられた岩手県大槌町に市から派遣され、援助物資集積所で自衛隊と共に物資の受入や、被災された皆さんへの配給等の活動に従事してきました。▼人口15千人のうち、約1割の1.6千人が死亡、行方不明。町長をはじめ町職員も32人と約1/4を失い、役場機能も停滞。そのような中、自主的に隣同士や地域で助け合って避難生活をされている方も多数。▼高齢者や赤ちゃん等に配慮した食料等、地域の実情に合わせた要求リストの取りまとめや、集積所から避難箇所までの運送も自分たち自身の手で実施。運送には、津波から助かった自家用車を活用されていました。その姿に被災地でも芽吹き始めた『桜の花』のような命の力強さとコミュニティの絆の大切さを感じました。▼物資を積んで帰られる際、私たちに掛けて頂いた「ありがとう」の一言が今も強く心に残っています。▼このコラムでは、プロジェクトメンバーが日ごろ感じている様々なことを交代でお伝えしていこうと思います。

大川だより

第2号(平成23年9月1日発行)

発行:大川活用プロジェクト

(事務局 守山市湖岸振興検討会)

大川プロジェクトに寄せて～アジアの村々とのつながりから自覚する新しい可能性～

京都大学生存基盤科学研究ユニット

・東南アジア研究所 安藤和雄

世界が発展することは、経済が発展することであると強く信じられています。日本はまさにその優等生として振舞ってきました。

都市への人口集中と工業、サービス業の過剰なまでの発展は、農村が発展の歪を一手に引き受けてきた結果でもあります。気がついてみれば、農業や農村文化に関する一方的な軽視の風潮がボディブローのように、農村で生活していくことの誇りや力を奪い取ってきたのです。

こうした風潮は、経済のグローバル化、近代化によって、アジアの国々、特に開発途上国にも広がりつつあります。アジアの村々が日本の農村が辿ってきた道を辿ってほしくないという思いで、自治会の皆さんが主催、共催されている釣りなどで子供たちが川に親しむ事業や大川周辺の植物観察会に、ミャンマー、ラオス、ブータンからの農業普及、農業地理を専門にしている大学関係者に参加してもらいました。

日本の農村は、今やと戦後一貫してとられてきた経済中心、インフラ中心の地域発展方式に、農村に住む人々が自ら疑問を感じ、地域の文化や自然に親しむことで、地域の活性を原点からもう一度つくっていかうとされています。

これまでの代償が大きかったには違いあり

ませんが、それ以上に私は地元の人たちが、主体的な取組によって生きる誇りや力を再生させようとしていることに喜びを感じています。

そういう人たちと出会うと私自身も元気になるれます。

農村に生きる人たちが自分たちの心を豊かにしていく地域発展のアプローチがあることを、いち早く、アジアの開発途上国の人々に知ってもらいたいのです。決して大げさな表現ではなく、大川プロジェクトで美崎自治会が取り組んでおられる事業は、アジアの開発途上国の農村発展の新たな可能性を具体的に示しているのです。

皆さん、是非、アジアの村々に目を向けてください。そして、大川プロジェクト、美崎町を、アジア、世界とのつながりという羅針盤に置いてみてください。



野洲でんくうの会中村先生から説明を聞く外国人参加者の方々(7月23日)

メンバーコラム第2回「夏の太陽にも負けない笑顔でした」

(守山市みらい政策課 木村)

6月26日、7月3日の両日、地域の方々のべ100人による水草除去作業が実施され、ヒシを中心に約12トンが水面から取り除かれました。▼私が参加した3日は早朝から照りつける太陽の下、26日の経験をふまえた自分で工夫した道具を携えた約60人が集結。その勢いにのみ込まれ、気がつけば私も胴長靴で大川にドボン!▼左右に分かれた2人の間に渡したロープにつけた「鉄の櫛」は歩くごとに水底から水草を刈り集め、また、胸まで水に浸かって作業をする方、慣れた手つきで「田船」を操り、刈り取った水草を集める方等、誰一人途中で投げ出すこともなく、約3時間にわたって作業が進みました。▼水は濁っているものの、川の中から眺める景色は思いのほか美しく、驚いて飛び立つサギの姿や水辺の風景は心を和ませてくれるものでした。また、40センチ以上の大きなコイが捕まるハプニングも。▼終了後、泥だらけになって疲れきったはずの皆さんの顔には楽しそうな笑顔が。その目の中に達成感とともに、大川への「誇り」を感じたのは私の思い込みのせい?

「大川の歴史」

～歴史を見つめて、将来を考えてみませんか～

現在は、澱んだ水と水草が繁茂する大川ですが、そんな大川にも歴史があります。

今回はその歴史を少し紹介させていただきます。

「大川ハ野洲川ノ支流ニシテ本大字東部水保境界ナル野洲川堤塘(ていと)ヲ穿チ水ヲ引クニ石樋ヲ以ラス其水西北ニ注ギ田野ヲ灌溉シツツ湖ニ入ル其延長拾七町三十間(約 1.9km) 幅員上流ニ於テハ式間(3.6m) 下流ニ至ルニ従ヒ廣リ約五間(約9m)」と、大正2年(1913年)刊の「稿本 速野村郷土史」に描かれています。そこからは過去から大川を地域の農業に活用してきた姿、更には人の手によって切り開かれた大川の姿が浮かび上がってきます。

野洲川の扇状地に位置する美崎地区では、肥沃な土地に目をつけた岐阜や名古屋、八日市からの入植者によって、大正時代には桑畑としての開墾が行われていたようです。

美崎が現在のような畑作地域のなったのは戦後のこと。その間も大川は地域の農業用水として、また、生活のための漁「おかずとり」や子ども達の遊び場として、地域との関わりの深い川であったことでしょう。先日、お話を伺った女性からも「私が嫁いできた昭和40年ころは、洗濯や風呂の水を大川から汲んでいたものですよ」と教えて頂きました。澄んだ流れを持ち、生活に密着した川であった当時の姿が想像されます。



昭和40年9月 洪水で孤立した人々の救助
に向かう自衛隊員 (守山市誌より転載)

一方で旧野洲川の支流であった大川では、水害の歴史が何度も繰り返されてきました。

昭和40年9月、台風24号による川の氾濫では、中洲に孤立した今浜新田の人々を救出しようとした自衛隊災害派遣隊隊長が殉職される悲しい出来事も。旧大川橋跡のほとりにこのことを記録する頌徳碑(しょうとくひ)が今も立っています。

その後、水害を防止する目的で野洲川放水路の整備が進められました。昭和54年には放水路への暫定通水が開始。しばらくして大川は現在のような上流からの水の流れのほとんどない、澱んだ河川に変化していきました。そのような移り変わりの中、水害による地域の被害はなくなりましたが、一方で「大川と地域」、「大川と生活」との関係性は薄れていったのでしょうか。

昭和の終わりごろには、すでに水草の繁茂が進んでいたようで、実験的に外来種である「草魚(ソウギョ)」が大川に放流されました。この魚は大量の水草を餌にすることから、一時的には水草が減少する効果もあったのですが、草魚が「日本の環境では繁殖ができない」こと、また、新たな放流については「在来種への影響が危惧されることから、外来種の導入には慎重な判断が必要であること」等から、現在は生息しておらず、また新たな放流は安易にするべきではないと考えられます。

「大川をもう一度、地域の中に取り戻そう」、「大川の環境を良くしよう」とする活動が地域の皆さんを中心として動き始めました。

今年からは水草除去や環境調査の活動が、守山市役所とともに京都大学や立命館守山高校等とも連携する中、「大川活用プロジェクト」として開始されています。

大川の「将来像」をどのように描くか、検討は始まったばかりです。今後、地域の皆さんとしっかりした意見交換をする中、もう一度、皆さんに親しまれる「大川」の復活に取り組んでいきたいと思っています。(守山市環境政策課 筈井)

大川だより

第3号(平成24年3月30日発行)

発行：大川活用プロジェクト

(事務局 守山市湖岸振興検討会)

大川を里川にかえていくために

大川の再生と今後の活用を地域の皆さん、京都大学、立命館守山中学・高等学校、行政が連携して検討・実施する「大川活用プロジェクト」も活動を開始して1年が経過しました。

この間、私たちは大川を「生活の中にある地域の記憶装置としての川」＝「里川」として位置づけ、まずは「大川に触れ、知ろう」、「できることからやってみよう」と地域の皆さんとともに様々な取組を進めてきました。

4回実施した水草除去では、繁茂するヒシ等の水草を2tトラック3杯分も除去。それぞれが船を持ち寄ったり、陸揚げのための網や水草を根元から切断する鎌を作成したりして、大川に胸まで浸かりながら作業を進めました。

また、子どもたちが大川に触れ、学ぶ機会づくりとして、7月に「野洲川でんくうの会」を講師に招いた自然観測会を、10月末には立命館 Sci-Tech 部生物班の指導による環境学習会を開催。透明度や水質、生物調査の結果から、「大川は汚い。ブルーギル等の外来種が多そう」との意見がある一方、「水質は継続して測定することが必要。寒かったので魚が少なかったのかも。来年もやりたい」との声も。なお、水質についてはより詳細で継続的な調査を立命館が手がけており、水質改善に向けた実証実験も本年度からスタートする予定。守山市でも閉鎖水域状態の改善に向け、近隣河川から導水できないか検討を開始したところです。

これらは12月3日に美崎自治会館で150名もの参加者を集めて開催した「大川フォーラム」の中で取組毎の実施者自身によって発表されました。また、伊藤自治会長、京大安藤氏、立命館八木氏、宮本市長によるパネルディスカッションでは、会場からの「子どもたちに何を



「大川」の将来を考えるパネルディスカッション

を伝えるのか」との大きな問題提起に対し、「大川に触れ、学び知ることによって『大川』という存在を次世代の子どもたちの『原風景』にしていくこと。『原風景』として相応しいものに地域自らの力で変えていくこと。そのことで大川は『地域の記憶装置』として、かつてのような『里川』として再生する。100年変わらない環境づくりが必要」との意見が交わされました。

プロジェクトの取組は様々な方面からも注目されており、NHKをはじめ京都新聞等への掲載や、京大による「在地と都市がつくる循環型社会再生の実践型地域研究」の研究成果としてミャンマーでの国際ワークショップ等でも取り上げられました。

今年はいくまでの継続とともに、将来像を「未来予想図」として一枚の絵に集約し、再生に向けた基本方針にしたいと考えています。そのために、子どもからお年寄りまで多くの方々の参加の中、描きあげていくことが目標です。

更には水質改善に向け立命館による実証実験とともに、地域による水草フロートを活用した実証実験も計画されています。

大川を「里川」に再生する取組はスタートしたばかりです。皆さんのより一層の参加をお願いします。

(守山市みらい政策課 木村)

大川活用プロジェクト ～今年度の活動と次年度に向けて～

立命館守山中学校高等学校 教諭 八木良明

立命館守山中学校高等学校は地域と連携した取り組みを重視してきました。これまでも、琵琶湖南湖のブルーギルの食性、バイオディーゼル燃料の有効性にかかわる研究などを行ってきました。

この「大川活用プロジェクト」にかかわることになったのも、こうした本校での取り組みを国内外で水環境に関する研究を行っている高校生と交流を図ることを目的とした「高校生国際みずフォーラム in 湖国・滋賀（以下、IWF）」を開催（2010年2月）する過程でできたネットワークがきっかけになっています。「大川活用プロジェクト」に主にかかわっているのは、本校の科学部である「Sci-Tech 部」の生物班のメンバーです。昨年10月30日に地域の子どもたちを対象に行われた「水環境調査」のティーチングアシスタントとして参加したり、12月の「大川フォーラム」で大川の水質の分析や水質浄化の基礎実験結果の発表の場をいただき、感謝しております。

次年度は、「大川の水質浄化」に関わって様々な実験・観察を地域の小学生を集めた公開講座（サイエンスキッズ）を6月に計画しています。そして、その経験を活かして今後は地域の小中学校への環境出前講座等が開講できるようにしていければと考えています。

また、次年度から新たに開講される「科学探究 I」（1年生必修）で「水系生態系の基礎調査方法」の学習の中に「大川活用プロジェクト」の取組を教材にして、地域の水環境問題について興味関心を高めていきたいと思います。今後は2年生で選択する「土曜講座」の中に水環境について科学的に探究する講座を設けたり、3年生の理系生徒が取り組む「課題研究」の研究テーマの1つにし、立命館大学をはじめとする様々な研究機関と連携して研究課題の充実・深化を図っていければと考えています。

そして、こうした成果を IWF で培われたネットワークで海外に発信し、「Think globally, Act locally」な生徒を少しでも多く育て、「地域に学び、世界に発信する」立命館守山の学びの充実と地域への貢献につなげていきたいと思っています。



水環境調査に取り組む立命館 Sci-Tech 部

プロジェクトの取組にわくわくしながら参加しています

（守山市 未来政策課 羽田野）

去る12月3日（土）に美崎自治会館にてプロジェクト主催による「大川フォーラム」が開催されました▼自治会による水草の除去や立命館守山高校の Sci-tech 部が取り組んだ水質調査などの活動報告も兼ねており、このフォーラムが、今後の大川を地域自身が描き始める大きなきっかけとなればと期待していました▼そして当日、80名も参加いただければいいなあと考えながら美崎自治会館で会場準備していたのですが、実際には150人という大盛況な結果になり、美崎自治会皆さんの関心と大川の秘めたるパワーをひしひしと感じました▼また、この大川での取り組みを京都大学の生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所が、ミャンマーで開催された研究会で発表され、諸外国の研究者から良い評価をいただいています▼国際的に注目されている「大川（OHKAWA）」を通じてのまちづくり、今後の活動にわくわくしています。

編集後記

大川活用プロジェクトは、参加型農村開発や参加型環境保全の諸活動の中でも大変ユニークです。美崎自治会の役員と会員の皆さんが、主役となって計画の立案から実施を行っておられます。住民参加型を超えた住民主導型のプロジェクトとなっています。美崎自治会のリーダーシップのもとに、立命館守山高校、守山市役所、京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所が参加しています。だからこそ大川フォーラムにおいても12月3日(土)の午後のお忙しい時にも関わらず、150名もの皆さんが美崎自治会館に参集されたのだと思います。平成23年度の活動を振り返る意味でも、関係者各位のご協力によって、活動の記録を報告書としてまとめました。

本報告書には文字の間違いがあるかも知れません。それらは編集者の私たちの責任でもありますので、ご容赦願いたいと思います。大川活用プロジェクトの今後の活動に本報告書が活用されれば幸いです。

(安藤和雄 2012年3月26日 記)



大川活用プロジェクト平成 23 年度活動報告書

発行日 平成 24 年 3 月
発行 大川活用プロジェクト
滋賀県守山市今浜町 2761-35
電話：077-585-1019
メール：(守山市役所)miraiseisaku@city.moriyama.lg.jp
編集 矢嶋 吉司・安藤 和雄
印刷所 (株)田中プリント
電話：075-343-0006
ISBN 978-4-906332-06-0